

葛 城 跡

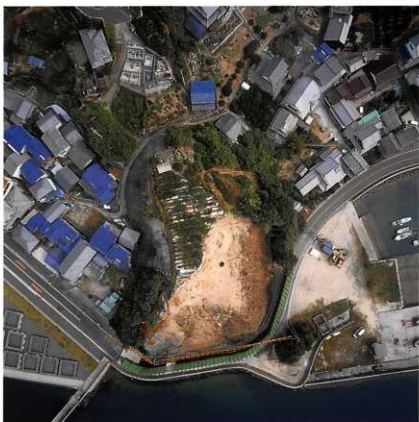
主要地方道大崎上島循環線沖浦工区
道路改良工事に係る発掘調査報告書

2015

公益財団法人 広島県教育事業団



a 空中写真（東から）



b 空中写真（直上から）

例 言

- 1 本書は、平成25（2013）年度に実施した主要地方道大崎上島循環線沖浦工区道路改良工事に係る葛城跡（広島県豊田郡大崎上島町沖浦所在）の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査は、広島県西部建設事務所との委託契約により、公益財団法人広島県教育事業団が実施した。
- 3 発掘調査は、主任調査研究員 唐口勉三、同 尾崎光伸が行った。
- 4 出土遺物の整理等は、唐口、尾崎、大田けい子（賃金職員）が行った。
- 5 本書は、尾崎が執筆・編集した。
- 6 本書に使用した遺構の略号は、調査中、各遺構とも用途・性格が特定できなかったため「S X」としたが、本書においても同様の略号を使用した。
- 7 押図の遺物番号と図版の遺物番号は同一である。
- 8 本書に使用した北方位は、日本測地系平面直角座標第Ⅲ座標系北を使用した。
- 9 第1図は、国土交通省国土地理院発行の1：50,000地形図「三津」を使用した。
- 10 出土遺物の石材同定については、柴田喜太郎氏（考古地質学研究所）に依頼した。
- 11 記録類及び出土品は、全て広島県立埋蔵文化財センター（広島市西区観音新町四丁目8-49）において保管している。

目 次

I はじめに	1
II 位置と環境	2
III 発掘調査の概要	
1 調査前の状況	5
2 発掘調査の方法・手順	6
3 遺構・遺物の概要	7
IV 遺構	
1 石垣及び帯郭状平坦面の調査	8
2 頂部平坦面の調査	12
V 遺物	
1 土器類	16
2 土製品類	27
3 石製品	27
4 金属製品	28
5 その他の遺物	29
VI 総括	
1 遺構について	
(1) 検出した遺構の性格	32
(2) 葛城跡の構造	33
2 遺物について	
(1) SX1出土土師質土器の出土状況	34
(2) SX1出土土師質土器の位置づけ	35
(3) SX2出土土師質土器の位置づけ	38
3 葛城跡の歴史的位置づけ	
(1) 葛城跡の年代	39
(2) 遺構と遺物の検討からみた葛城跡	40
(3) 文献資料からみた葛城跡	41
(4) 海城としての葛城跡の特徴	42

巻頭図版目次

- a 空中写真（東から） b 空中写真（直上から）

挿図目次

第1図	遺跡分布図（1：50,000）	3
第2図	葛城跡周辺地形図（1：3,000）	5
第3図	葛城跡範囲図（1：2,000）	6
第4図	遺構配置図（1：200）	9
第5図	東側石垣実測図（1：100）	10
第6図	南側石垣・西側石垣実測図（1：100）	11
第7図	頂部平坦面・石垣周辺土層断面図（1：100）	13
第8図	SX1実測図（1：40）	14
第9図	SX2実測図（1：60）	折込
第10図	SX3実測図（1：30）	15
第11図	SX1出土土師質土器分類図（1：4）	16
第12図	SX1出土遺物実測図1（1：3）	17
第13図	SX1出土遺物実測図2（1：3）	19
第14図	SX1出土遺物実測図3（1：3）	20
第15図	SX1出土遺物実測図4（1：3）	21
第16図	SX1出土遺物実測図5（1：3）	23
第17図	SX1出土遺物実測図6（1：3）	24
第18図	SX2出土遺物実測図（1：3）	25
第19図	葛城跡出土土・石・金属製品実測図（1：2）	28
第20図	葛城跡出土壁土実測図（1：3）	29
第21図	SX1出土土師質土器出土状況（1：40）	34
第22図	SX1出土土師質土器A類法量分布図	35
第23図	SX2出土土師質土器と他遺跡との比較（1：3）	39

表目次

第1表	土師質土器皿観察表1	30
第2表	土師質土器皿観察表2	31

図版目次

- 図版 1 a 葛城跡遺景 東から
b 東側石垣南端部 1 東から
c 東側石垣南端部 2 東から
- 図版 2 a 東側石垣南端部 土層断面 南東から
b 東側石垣中央部 1 北東から
c 東側石垣中央部 2 南東から
- 図版 3 a 東側石垣中央部 土層断面 北から
b 東側石垣南端部 スロープ状平坦面 北東から
c 東側石垣南端部 土層断面 南から
- 図版 4 a 南側石垣東半部 南西から
b 南側石垣東半部 土層断面 東から
c 南側石垣西半部 南西から
- 図版 5 a 南側石垣西半部 土層断面 西から
b 頂部平坦面南西下トレンチ 土層断面 北から
c 西側石垣 南から
- 図版 6 a 西側石垣 土層断面 南から
b SX 1 土層断面 南から
c SX 1 遺物出土状況 南から
- 図版 7 a SX 1 完掘 南から
b SX 2 完掘 西から
c SX 3 完掘 南から
- 図版 8 出土遺物 1
- 図版 9 出土遺物 2
- 図版 10 出土遺物 3
- 図版 11 出土遺物 4
- 図版 12 出土遺物 5
- 図版 13 出土遺物 6
- 図版 14 出土遺物 7
- 図版 15 出土遺物 8
- 図版 16 出土遺物 9
- 図版 17 出土遺物 10
- 図版 18 出土遺物 11
- 図版 19 出土遺物 12

I はじめに

主要地方道大崎上島循環線は大崎上島沿岸部を環状に巡る道路であるが、幅員が狭く車両の離合に支障を生ずる箇所があることが課題とされ、大崎上島循環線の整備は、広島県離島振興計画の中で、広域的な交通ネットワーク推進のための交通基盤整備と位置づけられた。（「広島県離島振興計画」平成15年4月）

沖浦工区では道路改良工事に先立ち、葛城跡の取扱いが課題となった。葛城跡は、平成23年4月1日付けで大崎上島町史跡に指定されていたが、大崎上島循環線整備に関連して、地元住民の安全性の確保の観点から、平成24年1月23日付けで指定が解除され、道路改良工事が計画された。

広島県西部建設事務所（以下「西部建設」という。）は、平成24年5月21日付けで文化財等の有無及び取扱いについて、大崎上島町教育委員会（以下、「町教委」という。）に協議した。同日付けで町教委から協議を受けた広島県教育委員会（以下、「県教委」という。）は、平成24年6月21日、町教委及び西部建設と三者で、葛城跡の保存について現地協議を行ったが、設計変更による現状保存は困難であるという結論に至った。

県教委は、同年7月9日付けで葛城跡について文化財保護法に基づく埋藏文化財としての取扱いが必要な旨を回答し、同年10月9・10日には対象地内の試掘調査を行い、遺物包含層・石垣・帯郭状平坦面を確認した。西部建設は、同年12月20日付けで、文化財保護法第94条第1項の規定に基づく通知を県教委に提出した。県教委は当該通知範囲の現状保存は困難と判断し、1,830㎡について、平成25年2月1日付けで記録保存のための発掘調査が必要である旨を通知した。

西部建設は公益財団法人広島県教育事業団（以下、「事業団」という。）に発掘調査依頼を行い、事業団は平成25年3月12日付けで文化財保護法第92条第1項の規定による発掘調査届を県教委に提出し、同年6月3日付けで県教委から慎重に発掘調査を実施するよう通知を受けた。事業団と西部建設は、同年5月8日付けで委託契約を締結し、事業団は遺跡現地における発掘調査を同年6月24日から7月31日まで実施した。

発掘調査期間中の平成25年7月27日には町教委と共催で現地見学会を実施し、約100名の参加があった。

本報告書は、以上のような経緯のもとに実施した発掘調査の成果をまとめたものであり、本地域の歴史と文化を知るための資料として広く活用されることを願うものである。

発掘調査の実施にあたっては、大崎上島町教育委員会、及び周辺住民等、地元関係者の皆様に多大な協力をいただいた。また、発掘調査・整理作業に際しては、当財団の埋藏文化財調査指導委員を含む次の方々からの指導・助言等を受けた。（氏名は五十音順、敬称略）

大成孝夫、小都隆、檜部大作、古賀信幸、柴田圭子、鈴木康之、妹尾周三、田中謙、中野良一、西井亨、藤野次史、古瀬清秀、増野晋次、松下正司、水野邦孝

II 位置と環境

1 地理的環境

葛城跡が所在する大崎上島は、広島県では倉橋島に次いで2番目に大きな島で、面積は約37.7km²である。島のほぼ中央部には神峰山（標高約453m）がそびえ、その稜線が東西を貫いている。この山の東から南にかけては平野部が少なく、北から西にかけては低丘陵が広がり平野部も多く海岸には干拓地が広く分布する。

葛城跡と竹原市とは直線距離で約13km、大崎上島の東には大山祇神社が鎮座する大三島（愛媛県今治市大三島町）があり、葛城跡と大山祇神社は直線距離でおおよそ7kmの位置にある。

平成15年（2003）年4月に、豊田郡木江町・同郡東野町・同郡大崎町が合併し、現在の豊田郡大崎上島町となった。

2 歴史的環境

大崎上島町においては、旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代の遺跡については大崎上島の北に位置する生野島で4遺跡が確認され、後期の遺物が出土している。弥生時代の遺跡は、生野島の西にある白島で1遺跡、生野島で9遺跡、大崎上島で1遺跡が確認されているが、いずれも包含地で、この時代の人々の生活のようすについては未だ不明な点が多い。

古墳時代になると、大崎上島町内の遺跡数は増加し、包含地は22か所、古墳は18か所が確認されている。古墳は、確認できるものはすべて円墳で、内部主体が箱式石棺の古墳が11基（うち6基は全壊）、横穴式石室が6基（うち5基は全壊）である。瀬井第3・4号古墳（12・13（番号は第1図と同一。以下同じ））は箱式石棺を有する古墳で、石棺の規模はいずれも1.7×0.4mである。塚崎古墳（14）は、町内で唯一残る横穴式石室を有する直径約10mの円墳で、昭和60年に発掘調査が行われている。

製塩遺跡も多く、古墳時代から古代にかけての製塩土器が出土したのは17遺跡に及ぶ。長松遺跡（10）、瀬井遺跡（11）は、古墳時代前半期と思われる製塩土器のほか、土師器・須恵器が出土している。

これら縄文～古代の包含地・古墳・製塩遺跡は、いずれも平野部の多い町内の北半部に分布しており、葛城跡がある旧木江町域では縄文～古代の遺跡は確認されていない。

中世の遺跡は、城跡が12か所、古墓が1か所確認されている⁽¹⁾が、このうち、城跡については、旧東野町域に比定される大崎東荘は5か所、旧大崎町域に比定される大崎中荘5か所、旧木江町域に比定される大崎西荘は2か所（葛城跡を含む）である。

中世の大崎上島は、13世紀半ば頃までは摂関家である近衛家領荘園として知られている。しかし、15世紀初頭頃には大崎中荘や大崎東荘は沼田小早川氏の惣領家の領有が認められる。一方、大崎西荘については、1411（応永18）年4月24日付けの「小早川義春議状写」（『小早川家文書』441）に「大崎西庄内兼行名上下」と「大崎実親名」がみえ、竹原小早川家の惣領である義春から



第1圖 遺跡分布図 (1:50,000)

- 【大崎上島】 1 葛城跡 2 向林城跡 3 宇祢山城跡 4 貫近古墓 5 轟倉城跡 6 大谷城跡 7 寺山城跡
 8 円山城跡 9 宮ノ首遺跡 10 長松遺跡 11 瀬井遺跡 12 瀬井第3号古墳 13 瀬井第4号古墳
 14 塚崎古墳
- 【大崎下島】 15 古城跡 16 南安土遺跡 17 土居城跡 18 西大浦遺跡 19 城の岸城跡
- 【愛媛県岡村島】 20 正月鼻古墳 21 観音崎城跡 22 城の鼻城跡

次男徳平に所領が譲られたことがわかる。義春がもつ所領は、1398（応永5）年以前にすでに嫡男仲義に譲られていることから、徳平に譲られた所領は土倉氏から嫁いだ義春の妻の所領と推測されており⁽²⁾、実質的には沼田小早川氏の庶子家の土倉氏の勢力下であったと考えられる。ちなみに、葛城跡の1.7km西にある御串山八幡宮には「当地頭殿土倉殿平冬平」と記された1426（応永33）年の棟札が残されている。

大崎上島におけるその後の社会的な動向については不明であるが、1575（天正3）年の小早川隆景書状中に「大崎衆」としてふれられており、中世末には小早川氏の支配下にあったことがわかる。

葛城跡に関する文献資料は残されていないが、江戸時代の地誌である『芸藩通志』では「葛山 沖浦村にあり 土倉是右衛門冬平 所居 應永頃 没落すといふ」と記載されている。

注

- 1 広島県教育委員会『瀬戸内水軍』昭和51（1976）年
広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第三集』平成7（1995）年
- 2 豊町教育委員会『豊町史 本文編』平成12（2000）年

参考文献

- 大崎町『大崎町史』昭和56（1981）年
- 岸田裕之「大崎上島と小早川氏一族」『内海文化研究紀要』第9号 広島大学文学部内海文化研究室 昭和56（1981）年
- 古瀬清秀「大崎上島諸島における製塩遺跡について」『内海文化研究紀要』第9号 広島大学文学部内海文化研究室 昭和56（1981）年
- 広島県『広島県史 中世編』昭和59（1984）年
- 平凡社『広島県の地名』昭和63（1988）年

Ⅲ 発掘調査の概要

1 調査前の状況

今回調査を実施した範囲の現況は、頂部平坦面の大部分はミカン畑で、北端には墓石（文政～明治年間の銘あり）が並んでおり、斜面部は森林（一部は崩落防止のためのコンクリート吹付）であった。今回、頂部平坦面のうち調査対象地外については、地権者の了解をいただき、簡単な略測図を作成した（第3図）。その結果、郭である頂部平坦面は東西約15～20m、南北約52mで、面積は約922㎡である。ただ、西側の斜面は大きく崩落した痕跡が確認でき、頂部平坦面の面積はもう少し広がった可能性がある。

発掘調査を行った頂部平坦面の標高は約24.0～25.5mで南に向かって下っている。頂部平坦面全体をみれば、現状で最も高いのは北端で、標高約26.9mである。発掘調査を行った南側とは1.4～2.9mの差があるが、盛土が流出したことを勘案してもやや差が大きいのにも思われ、北端部に櫓状の高まりがある可能性もある。城跡の北を画する堀切は現在里道として利用されており、里道の最も高い場所の標高は約18.0mで、頂部平坦面の北端から堀切までの比高は約8.9mである。堀切より北側の尾根筋上については、宅地や墓地、畑等があり一部平坦なところもあるが切岸はみられず、堀切より北には郭はないと考えられ、葛城跡はいわば単郭の城跡といえる。



第2図 葛城跡周辺地形図（1：3,000）

2 発掘調査の方法・手順

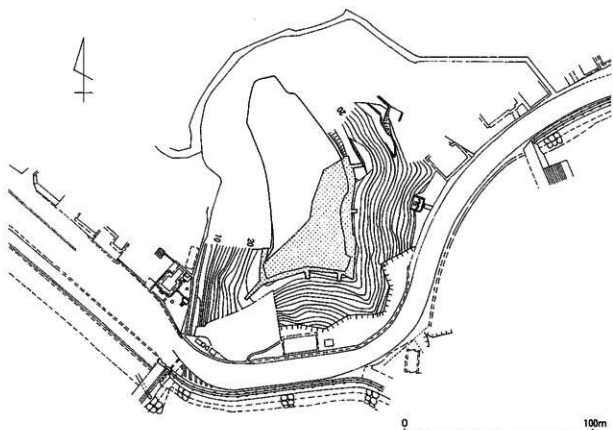
葛城跡の発掘調査は平成25年6月24日から7月31日まで実施した。調査面積は1,830㎡で、このうち掘削作業を行ったのは頂部平坦面、石垣部分及び帯郭状平坦面の計341㎡で、それ以外の斜面部分については、写真撮影及び一部地形測量を行った。

調査は、まず石垣部分の表土剥ぎを人力で行うことからはじめ、その後重機・人力による頂部平坦面の耕作土の除去作業を行った。調査前は、ミカン栽培に伴い高さ約40cmの畝が盛り上げられた状況が調査区全域でみられたが、耕作に伴う遺構面の掘削は部分的で、遺構は比較的良好な状態で検出した。

表土除去後は調査区を3分割し、南西隅を西区、南東隅を東区、北東隅を北区として、遺構掘り下げ、遺物取上げを行った。

石垣の実測については、地上型レーザースキャナーによる測量を実施し、平面図・立面図を作成した。遺構検出後は、調査区全域について、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。

石垣及び帯郭状平坦面については、7箇所のトレンチを設定し、石垣実測後に石を除去し土層断面の記録を行った。なお、土層断面の検討の結果、帯郭状平坦面とされていた部分については、平坦に造成した面が認められなかったことから、全面掘削は行わず、土層断面の記録に留めた。



第3図 葛城跡範囲図（1：2,000）（アミ目は調査範囲）

3 遺構・遺物の概要

調査の結果、頂部平坦面は南東隅を矩形に整形されていたが、他の部分は地形に沿った形でつくられた形状であると考えられる。

石垣は、郭縁辺部の東辺・南辺・西辺で確認したが、石が小さく積み方も乱雑で、大部分が城跡が機能していた時代のものではないと考えられる。ただ東辺の一部は比較的大きな石を横長に使い横目地を通した積み方をしていることから、当該期に積まれた石の可能性がある。なお、地表面観察で石垣前面にあるとされていた帯郭状の平坦面は、調査の結果確認できなかった。

頂部平坦面では、土坑2基（SX1・3）、段状遺構1基（SX2）を確認した。東辺では北に向かって下る幅約1.0mのスロープを確認し、登城路の一つと考えられる。SX1は2基の土坑が重複したもので、北側の土坑からは多量の遺物が、南側の土坑からは底面の炭化物層と焼礫が出土した。SX3は井戸と考えられる。段状遺構（SX2）は掘立柱建物跡1棟を検出した。

出土遺物は、土師質土器、瓦質土器、陶器（備前焼・亀山焼・天目碗）、磁器（青磁・白磁）、瓦、土製品（土錘・土玉）、石製品（基石・砥石）、金属製品（釘・刀子？）のほか、壁土・鉄滓・巻貝・魚骨等が出土した。

IV 遺構

1 石垣及び帯郭状平坦面の調査

(1) 東辺

北半（1 T 周辺 第5 図立面図 $X = -198.021$ から -198.029 ）では、高さ約 $0.6 \sim 1.2$ m、長さ約 8 m の石垣が残っている。基礎となる最下部には径約 $20 \sim 40$ cm の比較的大きめの石を用いて、横目地の通った積み方をしているが、それ以外は径 $10 \sim 20$ cm 程度の小型の石を多用し、しかも所々に落し積みが見られる。

中央付近（2 T 周辺 $X = -198.039$ から -198.042 ）にかけては、最下部と思われる石しか残っていないが、他の石垣部分の石の大きさとは全く異なる大型の石が使用されている。径約 $20 \sim 50$ cm の比較的大きめの石を横長に用いており、積み方としては比較的古式である。

南半（3 T 以南）では、東側への突出部が南北約 4.0 m、東西約 1.5 m の範囲（ $X = -198.048$ から -198.053 ）でみられた。平坦面上では、流出したためか盛土が認められず、東に向かって緩やかに下っている。 $X = -198.045$ から -198.048 の範囲では、高さ $0.5 \sim 0.6$ m、長さ約 3 m の範囲で石垣が残り、その前面（東側）には幅約 1.0 m、長さ約 3.0 m のスロープが検出された。スロープは北へ向かって緩やかに下っている。スロープから頂部平坦面へは高さ約 0.2 m の段差があり、階段1 段を上って郭へ入る感覚であるが、柱穴や礎石等の施設は検出されず、門があったかどうかは不明である。

突出部の東辺をなす石垣（ $X = -198.050$ から -198.055 ）は、大きなものは露出した基盤岩で、その周囲に小型の石がわずかに残っている。基盤岩以外の石は動いている可能性が高く、石垣の遺存状況はよくない。

トレンチ（1 T ～ 3 T）の土層断面では石垣はいずれも暗褐色土層上に置かれ裏込めも確認できなかった。調査前の段階では石垣の前面（東側）に幅 0.5 m 程度の帯郭状の平坦面があるとされていたが、土層断面の観察結果、平坦な面を造成した痕跡は認められなかった。

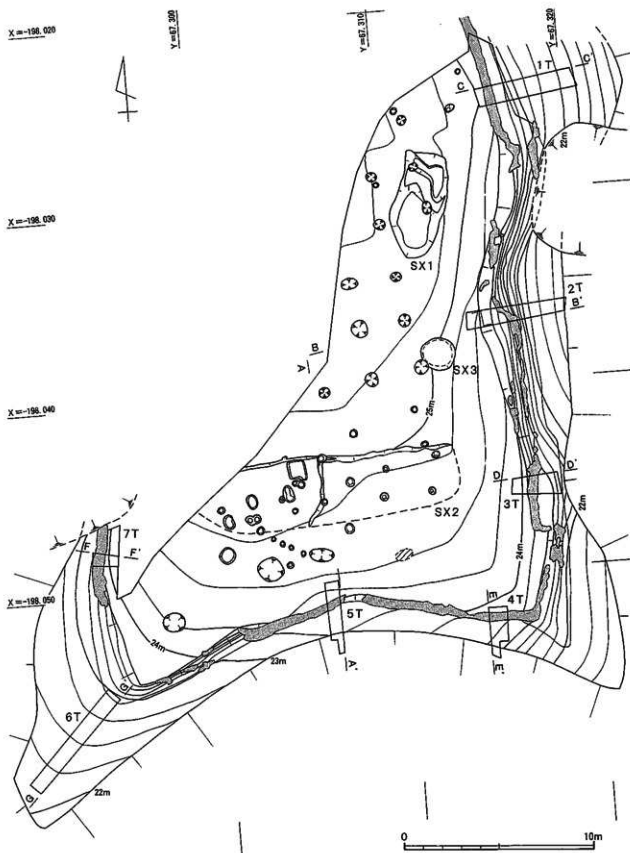
(2) 南辺

大きくは東半と中央部に石垣が残り、西半部分は遺存する石はわずかである。東半部と、中央部・西半部の石垣は直線的ではなく、 150 度の屈曲を有する。

東半部（4 T 周辺 $Y = 67.307$ から 67.317 ）は高さ $0.5 \sim 0.8$ m、長さ約 10 m に及ぶ。多くは径 $10 \sim 40$ cm 程度の石を用いて不規則で乱雑な積み方をしている。 $Y = 67.310$ から 67.314 にかけての最下部の石は横長の石を並べて横目地をそろえている。

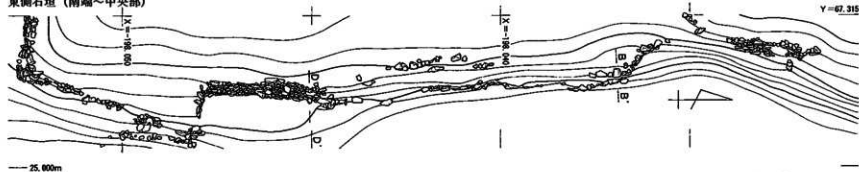
中央部の石垣（6 T 周辺）は高さ約 $0.5 \sim 1.7$ m、長さ約 6 m に及ぶ。多くは径 $10 \sim 40$ cm 程度の石を用いているが、やや大型の石が多く用いられている。ただ、積み方は乱雑で落とし積みが目立つ。

西半は石がわずかに残るのみで、現状では石垣とは呼べない。もともと石垣があったのかどうかも不明である。



第4図 遺構配置図 (1:200) (アミ目は石垣範囲, 斜線部分は焼土)

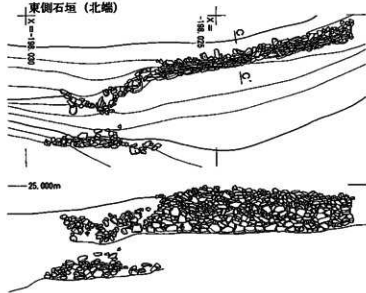
東側石垣 (南端~中央部)

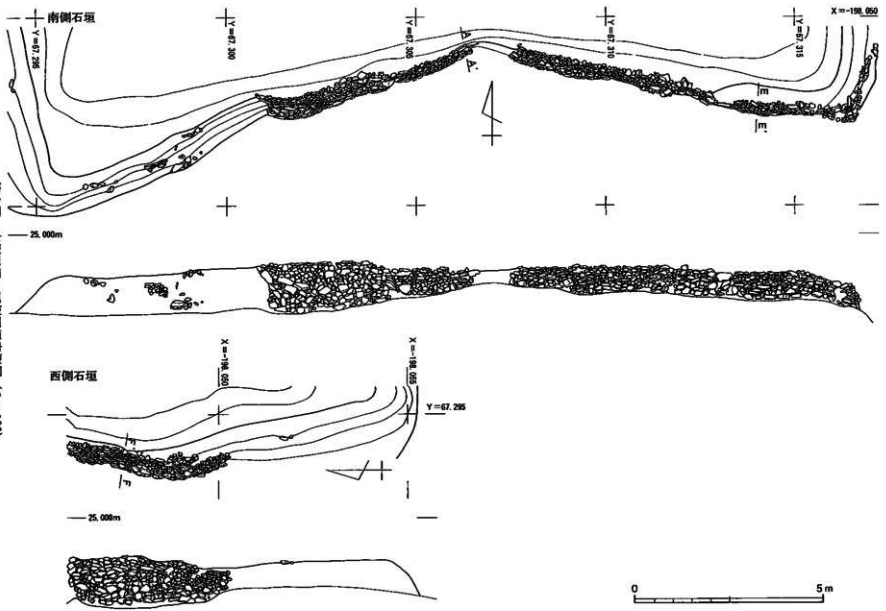


第5圖 東側石垣實測圖 (1:100)



東側石垣 (北端)





第6圖 南側石垣・西側石垣発掘図 (1:100)

トレンチ（4T～6T）の土層断面では、石垣はいずれも暗褐色土層上に置かれ、裏込めも確認できなかった。調査前の段階では石垣の前面（南側）に幅0.5m程度の帯郭状の平坦面があるとされていたが、土層断面の観察結果、平坦な面を造成した痕跡は認められなかった。

（3）西辺

高さ0.5～1.5m、長さ約4mの石垣を確認した。調査区外のさらに北に続く部分は過去に崩落したものと考えられ、現在はコンクリート吹付がされており、石垣が続いていたかどうかは不明である。径10～30cm程度の小礫が多く、積み方に規則性も見受けられない。

トレンチ（7T）の土層断面では石垣はいずれも暗褐色土層上に置かれ、裏込めも確認できなかった。

2 頂部平坦面の調査

（1）頂部平坦面

頂部平坦面は、耕作土下はすぐ地山面（花崗岩パイラン土及び花崗岩岩盤）であり、盛土は確認できなかった。

頂部平坦面の形状は、概ね地形に沿った形でつくられていたが、先述のとおり、南東隅については東西約1.5m、南北約4.0mの範囲で矩形に整形されている可能性が高い。ここへは、先述の北から上る幅1.0mのスロープが取り付く。矩形に整形されている範囲は、他の部分より地山面が大きく下がっており、おそらく0.5m程度の盛土がされていたのではないと思われる。

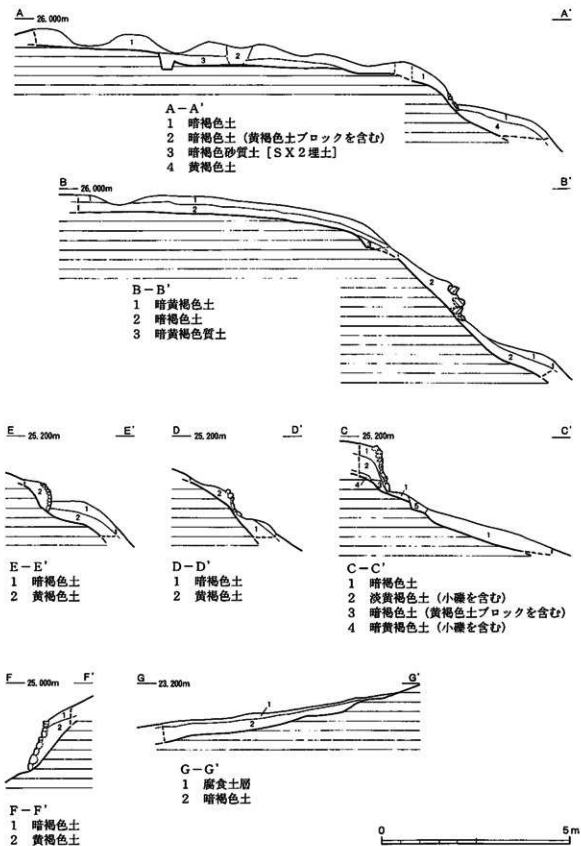
頂部平坦面上では、北区でSX1、東区でSX2・3を検出した。その他調査区のほぼ全域で、3m間隔で並ぶ窪みを確認したが、埋土中からビニール等が出土しており、耕作に伴う掘り込みと判断した。

（2）SX1

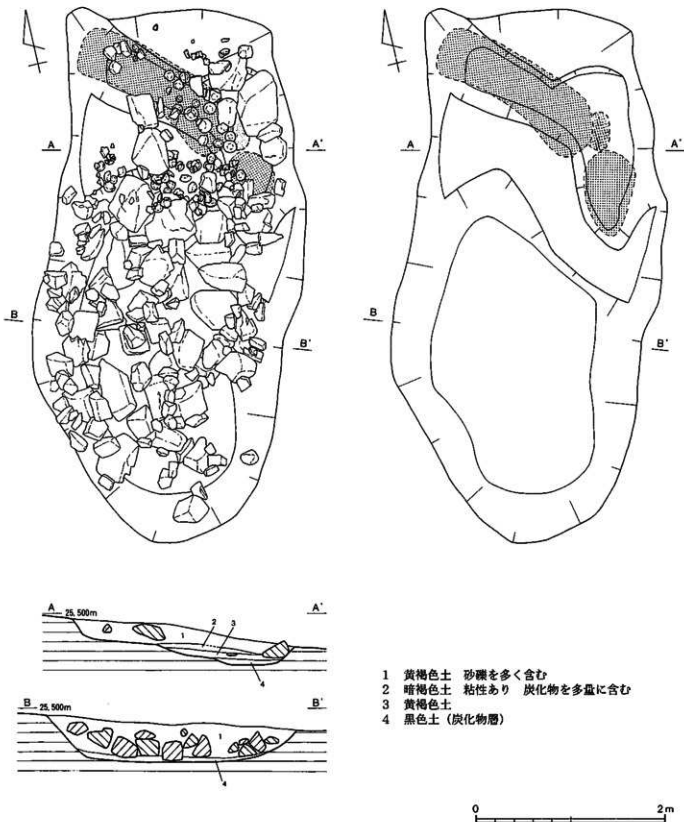
南北約5.6m、東西約2.6mの不整楕円形を呈する土坑である。当初は一つの遺構として掘り下げを行ったが、底面が北と南の2ヶ所で窪んでおり、2基の土坑が重複している可能性が高い。北側の土坑の方が新しいが、南側土坑の焼礫上から出土した土師質土器が北側土坑から出土したものと接合しており、両遺構の時期差はさほどないと考えられる。

南側土坑の底面は約3.0×1.8mで、上端面はおよそ4.0×2.6mの楕円形に復元できる。底面に厚さ約5cmの炭化物層があり、その上に径約10～50cmの多量の角礫（一部に円礫）が出土した。礫の多くは被熱により赤化していた。被熱した土師質土器片が少量出土している。

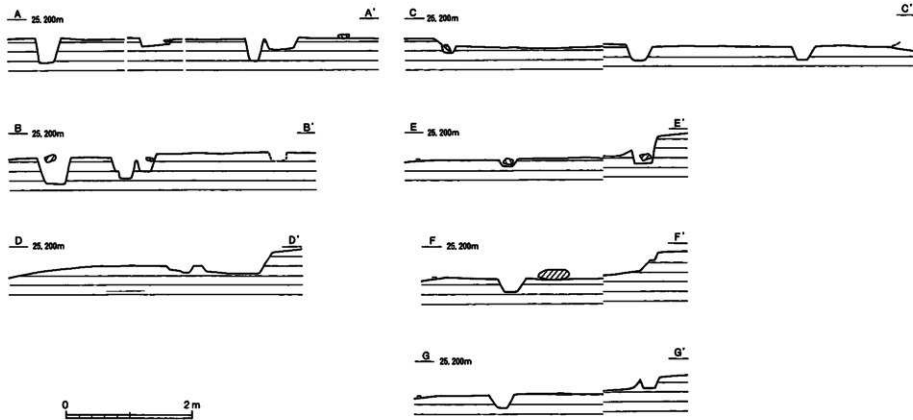
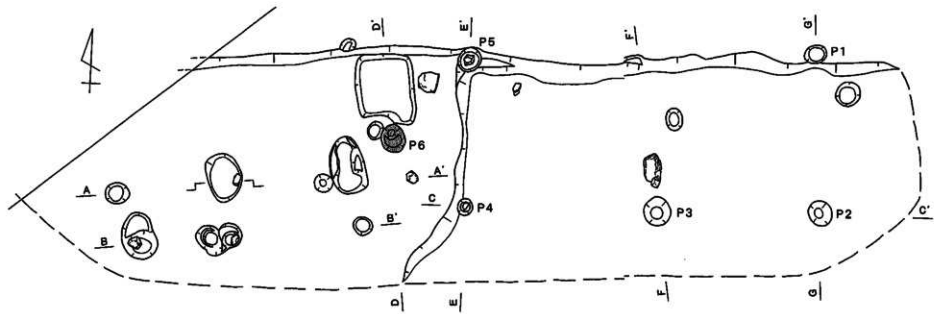
北側土坑の底面は約1.7×0.5mで、底面は北西方向にスロープ状に上がっている。上端面はおよそ2.5×2.5mの方形に復元できる。底面は焼けており、炭化物が多量に出土している。底面及び埋土からは多量の土師質土器皿とともに、土師質土器（鍋）、瓦質土器（播鉢）、陶器（備前焼〔甕・播鉢〕・亀山焼〔甕〕）、青磁、土鏝1点、釘11点、壁土（計1339g）、鉄滓（計58.6g）、巻貝2点、魚骨1点が出土している。土師質土器皿は完形に近いものが多く、表面もしくは裏面に上になっている状態で出土したものが多く、一部は重なった状態で出土した。それ以外の遺物については小



第7図 頂部平坦面・石垣周辺土層断面図 (1:100)



第8図 SX1実測図 (1:40) (濃いアミ目は炭化物, 薄いアミ目は焼土)



第9圖 SX2実測図(1:60)(アミ目は焼土範囲)

片が散在した状況で多く出土しており、一部は被熱した痕跡があった。

(3) SX2

南側に向かって削平された段状遺構である。一部調査区外に続くため、全容は不明だが、現状で東西方向で11.5m以上、斜面上からの深さ約0.15~0.25mで、南に約3.0mの平坦面を造り出している。

平坦面の東側約7.5mは西側に比べて約10cm低くなっており、この東側の一段低い平坦面には東西方向に長い1×2間の掘立柱建物跡が復元できる。梁行はP1-P2が約2.5m、P4-P5が約2.3m、桁行はP2-P3が約2.6m、P3-P4が約3.2mである。P1-P5は約5.7mで、中間で柱穴は確認できなかった。北側の柱穴(P1-P5)は平坦面よりも斜面上方(北側)にずれており、平坦面とは時期差がある可能性もある。柱穴の深さはいずれも約0.15~0.2mと浅い。

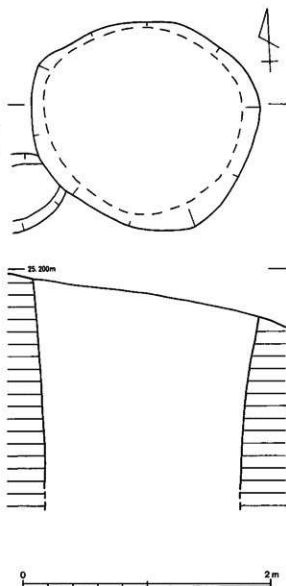
掘立柱建物跡の西約1.3mの位置にあるP6は直径約0.4m、深さ約0.1mで、壁面は焼けており埋土中には多量の炭化物がみられた。

出土遺物は、埋土中から土師質土器皿のほか、土師質土器(捏鉢・鍋・羽釜)、瓦質土器(槽鉢)、陶器(備前焼〔甕〕・亀山焼〔甕〕)、青磁、天目椀、土玉1点、瓦1点、基石1点、砥石2点、壁土(計420g)、鉄滓(計36.7g)が出土した。

(4) SX3

直径約1.8mの円形の土坑である。花崗岩の岩盤を掘り込んでおり、壁はほぼ垂直である。壁面に凹凸はなく、比較的平滑である。漆喰等は確認できなかった。深さは遺構確認面から約1.8mまで掘り下げたが、安全上の理由から、それ以上の掘り下げができなかった。

出土遺物は埋土中から土師質土器皿のほか、陶器(備前焼〔甕〕)、土錘1点、基石1点、鉄釘2点、刀子(?)2点、鉄滓(計400.0g)、巻貝1点が出土した。



第10図 SX3実測図(1:30)

V 遺物

1 土器類

(1) 土師質土器

① 皿 (第12~18図)

1~105はSX 1, 112~119はSX 2から出土した。

SX 1出土の皿は、器形・分量・底部切り離し技法・胎土等により、次のような分類を行った。

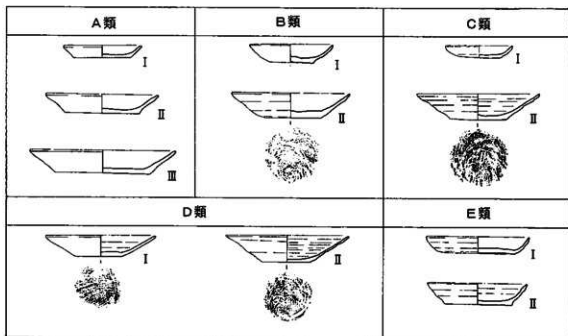
A類 口径と底径の比が概ね1.5:1で、底部切り離し技法が回転ヘラ切りの一類。色調は淡黄褐色から淡黄白色を呈し白色系である。胎土は精緻で砂粒をごくわずかに含む。内面底部は平坦か中央がやや盛り上がる。

このうち口径が8cm前後の一類をA I, 口径が12cm前後の一類をA II, 口径が15cm前後の一類をA IIIとする

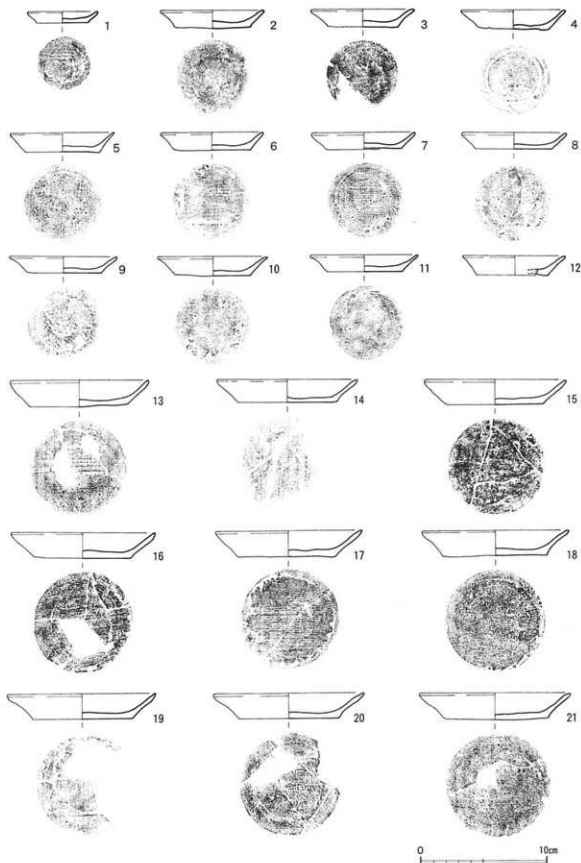
B類 口径と底径の比が概ね2.2:1で、底部切り離し技法が回転糸切りの一類。色調は淡黄褐色から淡褐色を呈し、A類に比べるとやや赤みがかっている。胎土はA類よりやや砂粒が多い。外面体部にナデによる幅広の凹みが1~2条めぐっているものが多い。内面底部は平坦か中央がやや凹む。

このうち、口径8.5cm前後の小型の一類をB I, 口径が13cm前後で口縁部外面がナデにより凹むものをB IIとした。

C類 B類と同様、口径と底径の比が概ね2.2:1で、色調は淡黄褐色から淡褐色を呈し、B類に比べるとやや淡い。胎土はB類よりやや砂粒が多く、径1mm程度の白色砂粒が目立



第11図 SX 1出土土師質土器分類図 (1:4)



第12圖 SX1出土遺物実測図1(1:3)

つ、体部から口縁部にかけては直線的で、B類と異なりナデによる幅1cm程度の凹凸が内外面にあり、さらにそれを平滑にしようと横ナデを加えている。底部切り離し技法は回転糸切りと考えられるが、他とは異なり、糸の撚りによって生じる条線が不明瞭で、撚りがないかあるいは撚りが太く条線が生じにくいものを使った可能性がある。

このうち、口径8cmの小型のものをCⅠ、13cm前後のものをCⅡとした。なお、CⅠとCⅡは器形が異なっているが、底部切り離し技法と胎土が共通していることから、同型式とした。

D類 口径と底径の比が概ね2.5:1で、底部が小さな一群。

このうち、口縁部が12cm前後で底部が静止糸切りの一群をDⅠ、口縁部が13cmで底部が回転糸切りの一群をDⅡとした。

E類 色調が暗褐色を呈し、胎土に雲母片を多く含む一群。

このうち、体部から口縁部にかけて直線的にハの字状に開く一群をEⅠ、やや内湾気味に立ち上がる一群をEⅡとした。

以下、この分類に基づき、個別に説明を行う。

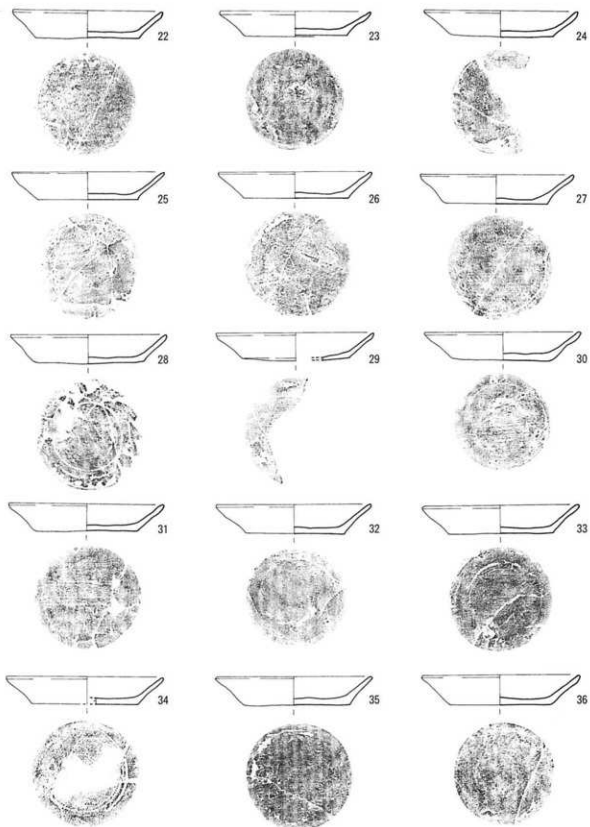
AⅠ類(1~12)は、2~12が口径8.2~8.6cm、器高1.3~1.5cm、底径5.5~6.0cmである。1は一応AⅠ類に含めたが、口径5.6cm、器高0.9cmと他のものより小型で、規格外の製品であると思われる。底部切り離し技法は回転ヘラ切りで、さらにナデでヘラ切りの痕跡を消しているものが多い。4・7・10は回転ヘラ切りの後、一方向の数条の条線が認められ、目の細かな板目状圧痕と思われる。内面底部はナデで平滑にしているものが多いが、9はわずかに指頭圧痕が残る。3・8はススが附着したり煤けて黒色に変色しており、灯明皿として利用されていたことがわかる。

AⅡ類(13~43)は、口径11.0~12.6cm、器高1.8~2.5cm、底径7.7~8.7cmである。42の底部切り離し技法は不明だが、それ以外は回転ヘラ切りで、13・15~18・20・21・26~31・33・34・41は目の細かな板目状圧痕、それ以外はナデにより回転ヘラ切りの痕跡を消している。内面底部は総じてナデで平滑にしているが、22・28・32・35・38・41は内面底部に渦巻き状の痕跡がわずかに認められる。17は内面底部に指頭圧痕が残る。

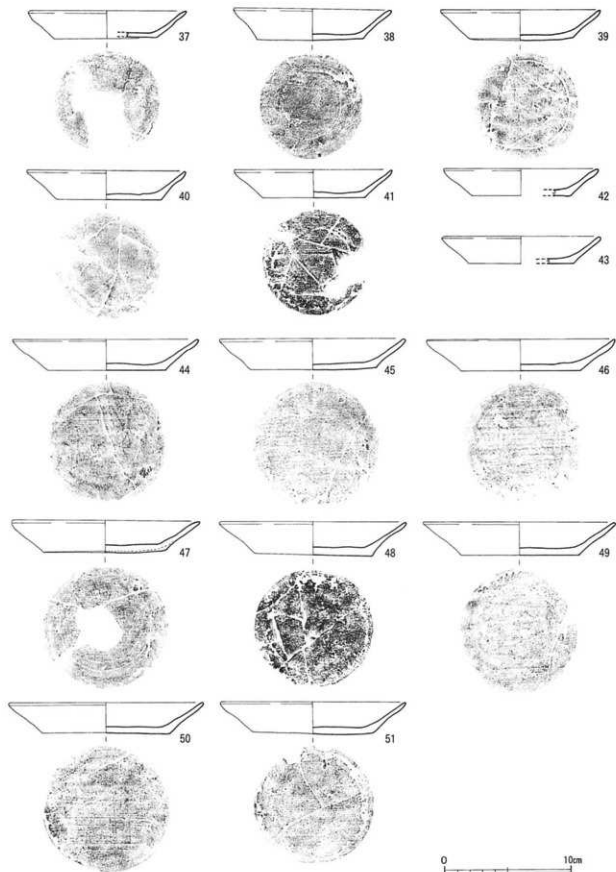
AⅢ類(44~51)は、口径14.8~15.8cm、器高2.4~2.6cm、底径9.4~10.0cmである。底部切り離し技法は回転ヘラ切りで、44~47・49~51は目の細かな板目状圧痕、それ以外はナデにより回転ヘラ切りの痕跡を消している。内面底部は総じてナデで平滑にしている。46は内面、47は外面に淡い黒斑があるが、使用時ではなく製作時についたものと思われる。

BⅠ類(52~58)は、口径7.8~9.0cm、器高1.5~2.3cm、底径4.1~5.0cmである。52~56は底部に回転糸切りの痕跡が残る。色調は淡褐色のものが多く、A類に比べると赤みがかっている。なお、56は暗褐色で内面底部中央に凹みがあり、他とは型式が異なる可能性もある。

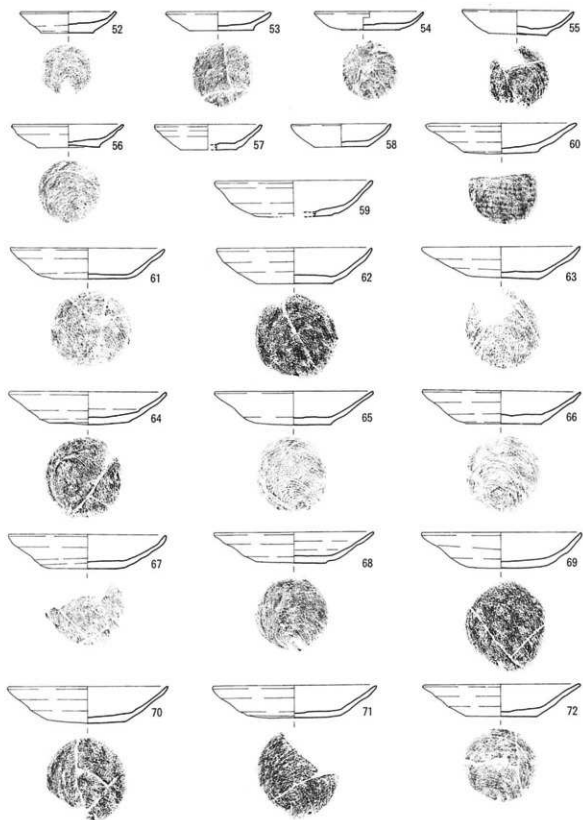
BⅡ類(59~81)は口径12.0~14.0cm、器高2.4~3.0cm、底径5.6~7.6cmである。外面体部に



第13图 SX1出土物实测图2 (1:3)



第14图 SX1出土遗物实测图3 (1:3)



第15圖 SX1出土遺物実測図4 (1:3)

ナデによる幅広の凹みが1~2条めぐっているものが多いが、内面部にはナデによる凹凸は認められない。口縁部は直線的に開くかもしくはやや内湾気味で、底部切り離し技法は回転糸切りである。61・71~73・75・78は内面底部中央が凹む。59は内面にタール状のスガが付着している。72は静止糸切りの可能性があり、底部も小さいことからD I類とすべきかもしれない。

C I類(82)は1点のみである。口径8.0cm, 器高1.4cm, 底径5.2cmである。白色砂粒を多く含んでいる。焼成はやや軟質である。

C II類(83~89)は、口径12.4~14.0cm, 器高2.8~3.1cm, 底径5.8~7.7cmである。他型式に比して口縁端部は細く仕上げられている。内外面には幅1cm以下のナデによる凹凸がわずかに認められるが、その上からナデが施されているため凹凸の痕跡はわずかである。先述のとおり、底部切り離し技法は回転糸切りと考えられるが、B類等では糸の燃りによって生じる条線が回転により丸く弧を描いているが、C類ではその条線が不明瞭である。

D I類(90~95)は、口径11.6~12.2cm, 器高2.2~2.7cm, 底径4.5~5.0cmである。他型式の同規模の皿に比べると底部が一回り小さい。底部切り離し技法はすべて静止糸切りである。色調は淡褐色でA類に比べると赤みがかっており比較的B類に近いが、B類よりは胎土の砂粒が少ない。体部から口縁部にかけては直線的で、C類のような体部から口縁部にかけてのナデによる凹凸はわずかにみられる程度である。

D II類(96~97)は口径13.0cm, 器高2.8~2.9cm, 底径5.2cmで、D I類より一回り大きい。D I類と同様に底部が小さいが、体部から口縁部にかけて厚さ1~2mmと他型式のものに比して特に薄くつらわれている。内外面には幅1cm以下のナデによる凹凸がみられ、さらにそれを平滑にナデ消そうとしている痕跡が残る。色調は淡褐色で、B類やD I類に比べるとやや褐色が強い。

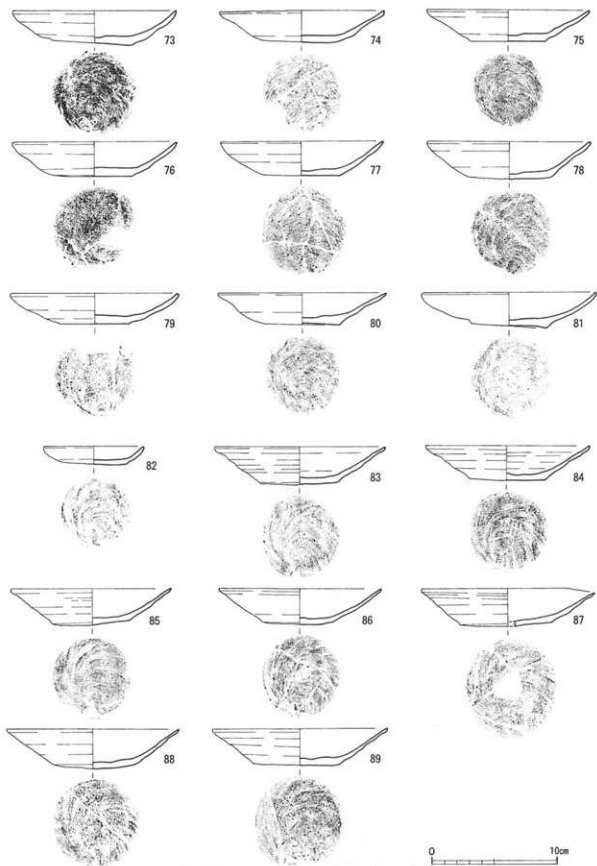
E I類(98~100)は、口径10.5~11.0cm, 器高2.0~2.8cm, 底径7.0~7.2cmである。底部からの立ち上がりはA類に類似する。底部切り離し技法は回転糸切りで、B類よりは条線が密である。99は内面と外面の一部に、100は口縁端部に淡い黒斑がある。

E II類(101~103)は、口径10.2~12.0cm, 器高1.7~1.9cm, 底径6.0~7.5cmである。体部外面にはナデによる凹凸がみられる。底部切り離し技法は回転糸切りであるが、条線の痕跡がE I類よりは不鮮明である。102は口縁端部に淡い黒斑がある。

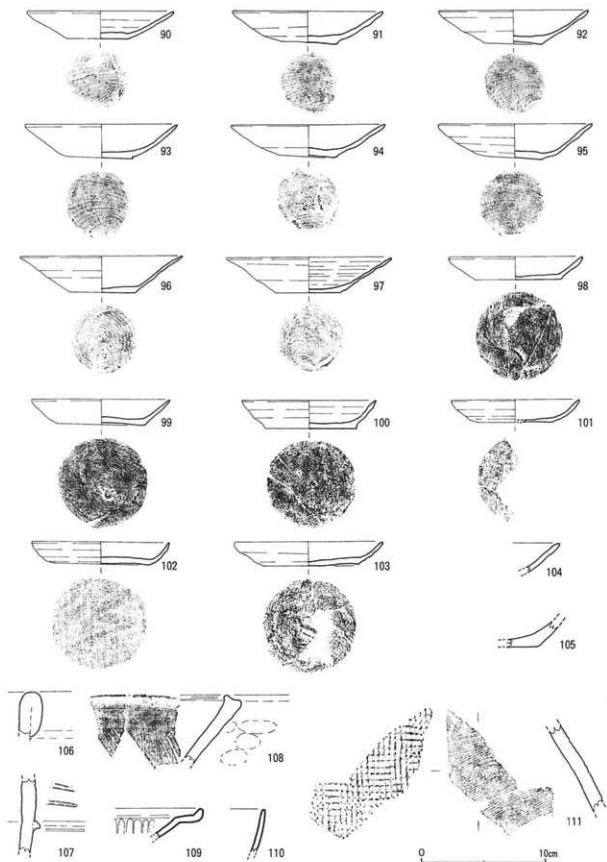
104・105は型式は不明である。104は皿の口縁部で、口径は不明で、被熱により赤化している。SX1の南半の埋土中から出土している。SX1は先述のとおり、焼礫が多量に出土した南半と土器が多量に出土した北半の2つの土坑が重複している可能性が高いが、104は南半の土坑に伴う。外面のナデによる凹凸と厚さからすれば、B類の可能性はある。105も法量は不明であるが、底部の厚さは0.8~1.0cmで、底径は10cm以上になる大型の器である。底部切り離し技法は磨滅により不明である。

SX2から出土した土師質土器皿については、SX1で行った分類はあてはまらない資料が多い。口径からは4つに分類できる。

112・113は、口径6.2・6.8cm, 器高は0.8・0.9cm, 底径は5.4・5.2cmで、器形はほぼ同一であ



第16图 SX1出土遗物实测图5 (1:3)

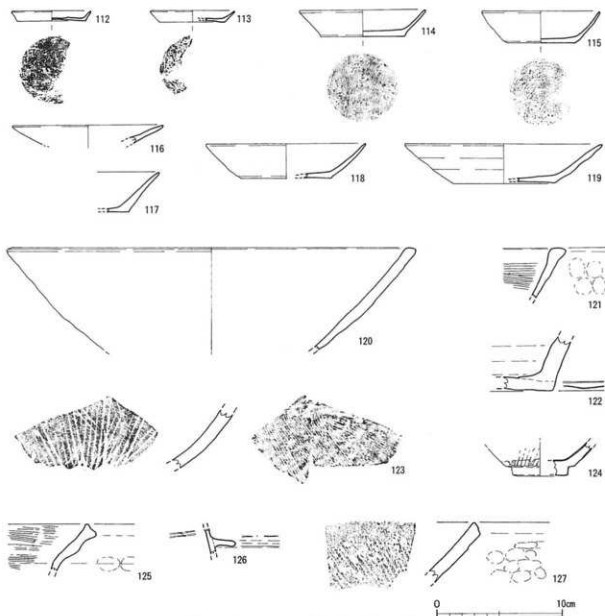


第17图 SX 1 出土遗物实测图 6 (1 : 3)

る。SX1出土の皿に比べると、底部からの立ち上がりがわずかで、全体的に薄手の作りである。底部切り離し技法は回転糸切りである。112は内外面にススが付着しており、灯明皿として利用されたことがわかる。

114・115は、口径10.0・9.4cm、器高2.1・2.5cm、底径6.8・5.4cmである。口径に比して器高がやや高く、杯に近い。底部切り離し技法は、115が回転糸切り、114は磨滅のため不明である。

118は口径12.8cm、器高2.7cm、底径7.2cmである。器形や法量はB類に近いが、外面体部のナデによる凹凸があまりない。底部切り離し技法は磨滅のため不明である。116は口径12.0cm、器高・底径は不明であるが、口縁部の角度から浅い器形であると推定される。SX1出土の資料中に似た器形はない。



第18図 SX2出土遺物実測図(1:3)

119は、口径15.6cm、器高3.1cm、底径8.0cmで、底部切り離し技法は磨滅のため不明である。外面の凹凸と厚さからSX1の南半で出土した114に似ている。また118と同類で一回り大きいタイプではないかと思われる。117は器高が3.1cmで口径・底径は不明である。口縁部はやや外反する。底部切り離し技法は回転ヘラ切りの後目の細かな板目状圧痕が施されている。A類に分類されるが、器高がAⅢ類より5mm程度高く、もう一回り大きいタイプ(AⅣ類)となる可能性がある。

②捏鉢 (第18図)

120はSX2から出土した。口径32.4cmで、内外面の調整は磨滅により不明である。淡褐色で砂粒を多く含んでおり、直径1mm程度の白色砂粒を多く含んでいる。

③鍋 (第18図)

121・125はSX2から出土した。いずれも口径は不明で、口縁端部を大きく肥厚させている。内面は横位のハケ目が施され、121の外面にはススが付着している。

④羽釜 (第18図)

126はSX2から出土した。鏝の部分と思われるが、小片のため詳細は不明である。

(2) 瓦質土器

①擂鉢 (第17・18図)

108はSX1、123・127はSX2から出土した。

108は口縁部は内側を肥厚させ、端部はナデにより窪ませている。外面は粗いナデで指頭圧痕が残る、内面は横ナデの後6条以上の擦り目を施している。淡褐色で焼成は良好である。

127は口縁部で、端部は平坦にし、外面はナデを施している。123は胴部で外面には斜位のハケ目が施されている。両方ともすり目は6条以上で淡青灰色をしており、焼成はやや不良である。同一個体の可能性がある。

(3) 陶器

①亀山焼 (第17・18図)

甕の胴部が主にSX1から出土した。またSX2からは小片が1点出土している。111は外面に格子目のタタキ、内面はハケ目が施されている。色調は明橙色で、外面は淡褐色である。

②備前焼 (第17図)

106はSX1、122はSX2から出土した。106は甕の口縁部で、玉縁の上半部である。口縁部はこの1点しか出土していない。122は甕の底部である。

③天目碗 (第18図)

124はSX2から出土した天目碗である。釉は黒色で、胎土は淡灰色で固く締っている。中国から輸入されたものと思われる。そのほか、SX1の南半で被熱した天目碗とみられる破片が1点出土している。

④その他 (第17図)

107はSX1から出土した。内外面は暗褐色、断面は赤褐色・灰色を呈しており、備前焼とよく似た胎土・焼成ではあるが、産地は不明である。内外面とも横ナデが施されており、外面には突

帯がめぐっているが、器種は不明である。

(4) 磁器

①青磁 (第17図)

109・110はSX1から出土した。109は折縁の盤とみられ、内面には蓮弁が施されている。口径の正確な復元は困難だが、概ね30cm程度になると思われる。110は椀の口縁部で、口径は不明である。内外面は無文である。

青磁はほかにも図示できない小片がSX1から12点、SX2から3点出土している。SX1出土の青磁片は一部被熱しているものがある。厚さが2.0cmの破片が1点あり、大型製品の底部と考えられる。SX2出土の小片のうち2点は華瓶の一部と思われ、文様が丁寧な掘り出しにより陽刻されている。もう1点は雷文がみられる。

②白磁

図示していないが、表土からいわゆる口禿げの白磁が1点出土している。

③近世・近代磁器

表土から近世・近代磁器が十数点出土しているが、小片のため図化できなかった。

2 土製品類

(1) 土鉢 (第19図)

128はSX1, 129はSX3から出土している。

128は長さ4.3cm, 最大幅1.2cmで中央に約4mmの孔が開けられている。重量は4.9gである。129は長さ3.5cmで一部欠損している。最大幅は1.0cmで、中央に約3mmの孔があり、重量は2.4gである。

(2) 玉 (第19図)

130はSX2から出土した。やや歪んだ球体で、一部欠損している。用途は不明である。

(3) 瓦 (第19図)

134は丸瓦の一部で、SX2から1点出土している。明黄褐色で外面は丁寧なナデ、内面にはコビキAの痕跡が残る。

3 石製品

(1) 礬石 (第19図)

131はSX2, 132はSX3, 133は表土から出土した。131は重量5.7gである。黒色で、石材はチャートである。132は重量3.2gで黒色と白色が斑になっている。閃緑岩である。133は重量1.9gで灰色、石材は凝灰岩である。いずれもよく磨かれている。

(2) 磁石 (第19図)

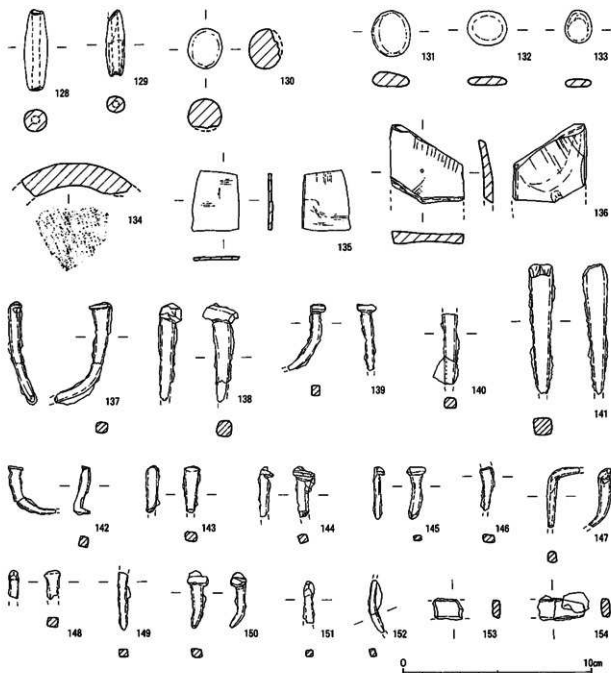
135・136はSX2から出土した。135は四方が割れており元の大きさは不明であるが、厚さ2mm程度と薄く、小型品と思われる。表裏の2面を使用しており、擦痕が残る。石材は熱変質泥質岩

(スレート)である。136は一ヶ所を折損しており、折れた部分以外の5面を使用している。表裏には擦痕が残る。石材は細粒凝灰岩である。

4 金属製品

(1) 釘 (第19図)

137~147はS X 1, 148・149はS X 3, 150は表土(西区), 151・152は西区のビットからの出土である。いずれも断面は方形で、先端を折り曲げて頭部としている。147は、比重が重く鉛など



第19図 葛城跡出土土・石・金属製品実測図(1:2)(104のみ1:3)

の素材が考えられる。それ以外は鉄製である。

(2) 刀子 (?) (第19図)

153・154はSX3から出土した。同一個体の可能性がある。断面は方形である。

5 その他の遺物

(1) 壁土 (第20図)

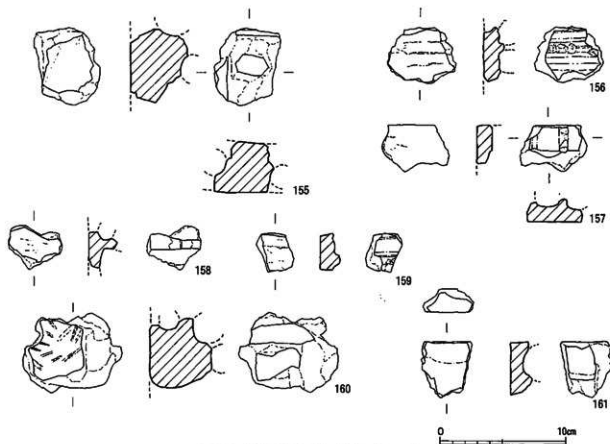
焼けた壁土はSX1から計1339g, SX2から420g, 耕作土等から118gが出土している。このうち7点を図示した。155~159はSX1, 160はSX2, 161は北区のピットから出土した。いずれも平滑に仕上げられた面の裏には下地の木舞(円形)の痕跡が残る。156・157は木舞と木舞の間隔が5mm程度, 158は1cm程度の間隔がとられている。151と161は木舞が直交している部分である。

(2) 鉄滓

鉄滓はSX1から計58.6g, SX2から計36.7g, SX3から計400.0gが出土している。

(3) 動物遺体

SX1から巻貝2点, 魚骨(椎骨)1点が, またSX3から巻貝1点が出土している。



第20図 葛城跡出土壁土実測図(1:3)

第1表 土師質土器皿観察表1

標本No	遺構名	口径 (cm)	脚高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	焼成	備考
1	SX 1	5.6	0.9	4.2	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
2	SX 1	8.2	1.4	6.0	砂粒微量含	黄褐色	良好	
3	SX 1	8.2	1.4	5.5	砂粒微量含	黄褐色	良好	内面全破・口縁部にスス付着
4	SX 1	8.2	1.5	5.5	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
5	SX 1	8.2	1.5	6.0	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
6	SX 1	8.2	1.4	6.0	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
7	SX 1	8.3	1.3	6.0	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
8	SX 1	8.4	1.3	6.0	砂粒含	淡褐色	良好	口縁部内外面の一部にスス付着
9	SX 1	8.6	1.3	5.9	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
10	SX 1	8.6	1.5	6.0	砂粒微量含	黄褐色	良好	
11	SX 1	8.6	1.3	6.0	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
12	SX 1	8.2	1.5	5.7	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
13	SX 1	11.0	2.1	7.7	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
14	SX 1	11.2	1.8	8.0	砂粒含	淡黄褐色	良好	
15	SX 1	11.2	2.0	7.6	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
16	SX 1	11.4	2.0	7.8	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
17	SX 1	11.6	2.0	7.7	砂粒微量含	淡黄白色	良好	
18	SX 1	11.6	2.0	8.2	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
19	SX 1	11.8	2.0	7.9	砂粒微量含	淡黄白色	良好	
20	SX 1	12.0	2.0	8.0	砂粒微量含	淡黄白色	良好	
21	SX 1	12.0	2.1	8.1	砂粒含	黄褐色	良好	
22	SX 1	12.0	2.2	8.0	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
23	SX 1	12.0	2.0	8.0	砂粒微量含	淡黄白色	良好	
24	SX 1	12.2	2.1	8.2	砂粒微量含	黄褐色	良好	
25	SX 1	12.2	2.2	8.0	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
26	SX 1	12.2	2.1	8.2	砂粒微量含	黄褐色	良好	
27	SX 1	12.2	2.3	8.0	砂粒微量含	黄褐色	良好	
28	SX 1	12.4	2.3	8.7	砂粒含	淡黄白色	良好	
29	SX 1	12.4	2.2	8.4	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
30	SX 1	12.4	2.2	7.8	砂粒含	淡黄褐色	良好	
31	SX 1	12.4	2.1	8.0	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
32	SX 1	12.4	2.2	8.0	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
33	SX 1	12.5	2.2	8.2	砂粒微量含	淡黄白色	良好	
34	SX 1	12.5	2.2	8.5	砂粒微量含	淡黄白色	良好	口縁端部に平坦面
35	SX 1	12.6	2.2	8.5	砂粒微量含	淡黄白色	良好	
36	SX 1	12.6	2.3	8.0	砂粒微量含	淡黄白色	良好	
37	SX 1	12.6	2.2	8.2	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
38	SX 1	12.6	2.5	8.5	砂粒微量含	淡黄褐色 (一部明黄褐色)	良好	
39	SX 1	12.6	2.4	8.3	砂粒微量含	淡黄白色	良好	
40	SX 1	12.6	2.3	8.4	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
41	SX 1	12.6	2.2	8.2	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
42	SX 1	12.2	2.2	8.0	砂粒微量含	淡黄白色	良好	
43	SX 1	12.6	2.2	8.4	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
44	SX 1	14.8	2.4	9.4	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
45	SX 1	14.8	2.4	10.0	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
46	SX 1	14.9	2.5	9.5	砂粒微量含	淡黄白色	良好	内面底部に淡い黒斑
47	SX 1	15.0	2.5	9.7	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	外面一部に淡い黒斑
48	SX 1	15.0	2.6	9.3	砂粒微量含	淡黄白色	良好	
49	SX 1	15.4	2.6	9.4	砂粒微量含	淡黄白色	良好	
50	SX 1	15.5	2.4	10.0	砂粒微量含	淡黄褐色	良好	
51	SX 1	15.8	2.5	9.6	砂粒微量含	淡黄白色	良好	
52	SX 1	7.8	1.7	4.1	砂粒多量含	淡褐色	良好	口縁端部に平坦面
53	SX 1	8.4	1.5	5.0	砂粒多量含	淡褐色	良好	口縁端部に平坦面
54	SX 1	8.8	1.5	4.8	砂粒多量含	淡褐色	良好	
55	SX 1	8.9	1.9	4.6	砂粒多量含	淡黄褐色	良好	
56	SX 1	9.0	2.3	5.0	砂粒多量含	暗褐色	良好	
57	SX 1	8.6	2.0	4.4	砂粒含	淡黄褐色	良好	

第2表 土師質土器血観察表2

順No	道標名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	焼成	備考
58	SX1	8.0	1.8	4.2	砂粒含	淡褐色	良好	
59	SX1	12.6	2.8	6.0	砂粒微量含	黄褐色	良好	内面にスス付着
60	SX1	12.0	2.4	6.0	砂粒含	黄褐色	良好	
61	SX1	12.2	2.4	6.2	砂粒多量含	淡褐色	良好	
62	SX1	12.2	2.8	6.0	砂粒多量含	淡褐色	良好	
63	SX1	12.6	2.5	5.9	砂粒含	黄褐色	良好	
64	SX1	12.6	2.6	6.4	砂粒多量含	淡褐色	良好	
65	SX1	12.6	2.6	6.0	砂粒含	黄褐色	良好	
66	SX1	12.6	2.6	6.0	砂粒含	淡黄褐色	良好	
67	SX1	12.6	2.7	6.0	砂粒多量含	淡褐色	良好	
68	SX1	12.8	2.4	5.8	砂粒多量含	黄褐色	良好	
69	SX1	12.8	2.8	5.8	砂粒多量含	淡褐色	良好	
70	SX1	12.8	2.9	6.2	砂粒多量含	淡褐色	良好	
71	SX1	13.0	2.5	7.6	砂粒多量含	淡黄褐色	良好	
72	SX1	12.6	2.5	5.6	砂粒多量含	淡黄褐色	良好	口縁端部に平坦面
73	SX1	13.0	2.5	6.3	砂粒多量含	淡褐色	良好	外面一部に淡い黒斑
74	SX1	13.0	2.5	6.0	砂粒微量含	黄褐色	良好	
75	SX1	13.0	2.5	6.0	砂粒多量含	淡褐色	良好	
76	SX1	13.0	2.7	6.5	砂粒多量含	淡褐色	良好	
77	SX1	13.0	2.7	6.0	砂粒多量含	黄褐色	良好	
78	SX1	13.0	3.0	6.4	砂粒多量含	明褐色	良好	
79	SX1	13.4	2.4	6.0	砂粒多量含	明褐色	良好	口縁端部の一部に平坦面
80	SX1	13.2	2.5	5.8	砂粒多量含	淡黄褐色	良好	
81	SX1	14.0	2.6	6.5	砂粒多量含	淡黄褐色	良好	口縁端部に平坦面, 底面外面に粘土継ぎ上痕
82	SX1	8.0	1.4	5.2	砂粒多量含	淡褐色	やや軟質	口縁端部に平坦面
83	SX1	12.4	3.0	5.8	砂粒多量含	淡褐色	良好	
84	SX1	12.8	2.8	6.0	砂粒多量含	淡褐色	良好	
85	SX1	13.0	2.8	6.5	砂粒多量含	黄褐色	良好	
86	SX1	13.0	2.9	6.0	砂粒多量含	淡褐色	良好	
87	SX1	13.6	3.0	7.7	砂粒多量含	淡黄褐色	良好	
88	SX1	13.6	3.1	6.6	砂粒多量含	淡黄褐色	良好	
89	SX1	14.0	3.0	6.5	砂粒多量含	黄褐色	良好	
90	SX1	11.6	2.2	5.0	砂粒多量含	淡褐色	良好	
91	SX1	12.0	2.5	4.5	砂粒多量含	明褐色	良好	
92	SX1	12.0	2.7	4.8	砂粒多量含	黄褐色	良好	
93	SX1	12.2	2.6	5.0	砂粒含	淡褐色	良好	
94	SX1	12.2	2.6	4.6	砂粒含	淡褐色	良好	
95	SX1	12.2	2.7	5.0	砂粒含	明褐色	良好	
96	SX1	13.0	2.9	5.2	砂粒含	淡褐色	良好	
97	SX1	13.0	2.8	5.2	砂粒含	淡褐色	良好	
98	SX1	10.5	2.8	7.0	砂粒含	淡褐色	良好	
99	SX1	11.0	2.0	7.0	砂粒微量含	褐色	良好	
100	SX1	10.6	2.2	7.2	砂粒多量含	淡褐色	良好	
101	SX1	10.2	1.7	6.0	砂粒多量含	淡褐色	良好	
102	SX1	12.0	1.7	7.5	砂粒含	褐色	良好	
103	SX1	11.7	1.9	7.5	砂粒多量含	褐色	良好	
104	SX1	不明	不明	不明	砂粒微量含	暗赤褐色	良好	全体的に強い被熱
105	SX1	不明	不明	不明	砂粒多量含	明橙褐色	良好	
112	SX2	6.2	0.8	5.4	砂粒含	明橙褐色	良好	
113	SX2	6.8	0.9	5.2	砂粒含	外: 明橙褐色 内: 灰褐色	良好	
114	SX2	10.0	2.1	6.8	砂粒含	淡黄褐色	やや軟質	
115	SX2	9.4	2.5	5.4	砂粒含	淡黄褐色	やや軟質	
116	SX2	12.0	不明	不明	砂粒含	暗褐色	良好	
117	SX2	不明	3.1	不明	砂粒微量含	淡黄白色	良好	
118	SX2	12.8	2.7	7.2	砂粒含	淡黄褐色	良好	
119	SX2	15.6	3.1	8.0	砂粒多量含	淡黄褐色	やや軟質	

V 総括

1 遺構について

(1) 検出した遺構の性格

① SX1

SX1については、第IV章で既述したように、比較的近接した時期につくられた2つの土坑が重複している可能性が高い。

先につくられたと推定される南側土坑は、底面に堆積していた炭化物層とその上で確認された被熱した角礫から、火を焚いた痕跡と捉えることができる。出土遺物は、混入した土器類の小片しかなく手がかりはないが、次の可能性を考えたい。

一つは烽火（のろし）として使われた可能性である。本城跡は、正面に瀬戸内海にかぶ島々や遠く四国まで見渡せる。近隣の島々や近くを通る船に日中合図を行うには烽火は有効な手段であったであろう。もう一つは、何かの生産が行われた可能性も想定しておきたい。例えば、土坑の規模や時代は違うが、安芸高田市の郡山城下町遺跡では、平面形が約2.9×1.3mの長方形で、深さ約0.25mの土坑から多数の被熱した礫が出土しており、石を焼いて水をかけ、発生する蒸気で麻を蒸して皮をはいだ、いわゆる「麻釜」と想定されている⁽¹⁾。大崎上島での当時の産業のようすについては、製塩や農業、林業が考えられるが、例えば、1638（寛永15）年の沖浦村の地誌帳には7反6畝12歩の塩浜があり⁽²⁾、製塩が中世までさかのぼる可能性は高いものの、山上にある城内で何らかの作業を行うことはないと思われる。その他、江戸時代には楮の生産が行われていることが知られ⁽³⁾これが中世にさかのぼる可能性や、中世に広く行われていた麻苧の生産⁽⁴⁾の可能性も検討してみる価値がある。いずれにしても、何らかの生産に関連する遺構である可能性もある点を指摘しておきたい。

一方、その北側に隣接する位置に掘られた北側土坑の性格については、土師質土器皿以外では、青磁、瓦質土器（播鉢）、亀山焼（甕）、備前焼（甕・播鉢）、土甕、鉄釘、壁土、動物遺体（巻貝・魚骨）が出土し、土師質土器皿以外の土器類は小片が多く一部の青磁や壁土は焼けており、破損したり不要となったものが廃棄されたものと思われる。その一方で、土師質土器皿の出土状況を見ると、焼けたものがなく完形に近い形で土坑の中に残されており、他の遺物とは明らかに異なる一括投棄が行われたものと考えられる。

このような遺物のあり方から想定されるのは、土師質土器皿が何らかの儀礼に用いられた可能性である。草戸千軒町遺跡で土師質土器が多量に出土した遺構を検討した鈴木康之氏は、SG4415等の検討を行う中で、陶磁器の多くが小片で火を受けた痕跡があり、稜や木片等までが焼けているのに、同じ遺構内から出土した約500個体の土師質土器は焼けていない状況から、本遺構が「遺物の多くが火事場処理の廃棄物という特質をもっているのに対して、土師質土器食膳具だけはそれとは異なる契機で遺構内にもたらされた可能性」を考え、土師質土器皿が「施設め戻しの儀礼」に使われたとしている⁽⁵⁾。この例に従うなら、北側土坑も火事場処理の廃棄物を投棄後、

土師質土器皿による儀礼を行い、その後埋め戻しを行った事例といえよう。

② SX2

SX2については、平坦面とともに小規模な掘立柱建物跡が検出され、簡易な居住空間が想定される。瓦が1点出土しているが時期は不明で、本遺構に伴うものかどうかは明らかではない。おそらく瓦葺ではなく、板や茅等の植物性の材料を屋根材とした建物と考えられる。

出土遺物の特徴では、土師質土器皿のほか、砥石・碁石・天目椀・青磁（華瓶）・備前焼（甕）・鉄滓等の遺物が出土しており、遊戯や喫茶に関連するものが認められる。また砥石・鉄滓から小規模な鍛冶が行われていた可能性も考えられ、掘立柱建物跡の西約1.3mの位置にある、壁面が焼け埋土中に炭化物が多くみられるP6がこれに関わる可能性もある。

掘立柱建物跡は郭の先端に位置していることから、海を航行する船舶や島に対する見張りの役割もあったのではないかとと思われる。

③ SX3

SX3は、平面形は円形で壁面はほぼ垂直に落ちる素掘りの土坑である。山上の城跡においては、地表面観察では多くの城跡で井戸状の落ち込みを見ることができ、県内では広島市の有井城跡⁽⁶⁾、東広島市の薬師城跡⁽⁷⁾、竹原市の高崎城跡⁽⁸⁾で同様の土坑の調査が行われている。有井城跡は最高所の第1郭から素掘りの土坑が確認されており、径約2.2m、深さ4m以上、薬師城跡は径約4×3mで、深さは10m以上である。高崎城跡は径2.0×1.9mで、深さは不明であるが10m程度と推定されており、壁面は漆喰が塗られている。いずれの遺構も、底面が確認できないほど深く掘られているのが特徴である。こうした土坑は、その形態から井戸と想定されるが、山上では湧水は期待できないことから、井戸との断定が困難な部分もある。発掘調査が行われた中で、このうち水が貯まっていた痕跡が残っていたのは有井城跡だけである。

本城跡の場合、貯水・湧水の痕跡は認められないが、花崗岩の岩盤を掘り窪めていることから貯水性はあったと考えられ、SX3は雨水や麓からくみ上げた水を溜める溜め井戸と考えたい。

（2）葛城跡の構造

葛城跡は城跡の規模は東西約15～20m、南北約52m、面積は約922m²で、県内では小規模⁽⁹⁾（小都隆氏の分類では極小規模⁽¹⁰⁾）である。

今回の調査では、郭全体のおよそ1/3しか調査をしておらず、全体が把握できたわけではないが、城跡の構造について明らかになったことを整理したい。

葛城跡は、発掘調査前の地表面観察による縄張り図が作成された際⁽¹¹⁾には、郭の周囲に石垣が巡り、石垣の前面には帯郭状の平坦面が巡っているとされていた。しかし、調査の結果、大部分の石垣は、後世に積まれたものと考えられる。また、帯郭状の平坦面も表土部分が平坦になっていたものの、地山の加工や盛土が行われた痕跡はみられなかった。ただ、東辺にある一部の石垣は中世に築かれた可能性が残っている。城の石垣は崩落防止以外にも視覚的なイメージを重視して築かれる場合があり、本城跡は東側を意識した造りであるといえる。

郭の南東隅は矩形に整形された可能性があり、ここへ取りつく北から上る幅約1.0mのスロー

ブが長さ約3mにわたって確認された。山上の城跡で矩形が採用されるのは、一般的には侵入する敵に対して側面から攻撃する「横矢掛け」や入口（虎口）に変化をつける「桁形」が採用されるようになって以降といわれている¹²⁾が、県内では15世紀代の城跡と考えられている広島市恵下城跡¹³⁾で矩形の張り出しがあり、15世紀の例としては本城跡が県内2例目となる。

スロープは長さ約3mしか検出できず、さらに下にくだる部分は崩落しているものと思われる。他にも登城路があった可能性はあるが、今回の調査で検出した登城路は東側の麓の集落や、あるいは港等と強い結びつきをもっていることが考えられる。

郭内の状況については、全容は不明だが、先端部（南側）に簡易な居住空間（SX2）が、虎口近くには井戸（SX3）がある。そのほか、遺跡全体から焼けた壁土が出土しており（その多くはSX1）、土壁を有する建物の存在が想定できる。

2 遺物について

(1) SX1出土土師質土器の出土状況

SX1からは多くの土師質土器皿が出土しており、実測可能なもの105点を掲載した。遺物はほとんどが3/4個体以上で完形も少なくない。なお、破片の接合後、実測に適さない小片の数はわずかで、皿の総数は120枚を超えることはないと思われる。

前章では、これらの遺物を、器形・調整・胎土で分類をした。その出土状況を示すのが第21図である。調査では105点のうち75点の遺物の出土位置を記録し取上げを行っており、それを型式



第21図 SX1出土土師質土器出土状況（1：40）

ごとに位置を示した。これにより、各型式が層位や位置により分離できず、一度に投棄されたことがみてとれる。

(2) SX1出土土師質土器の位置づけ

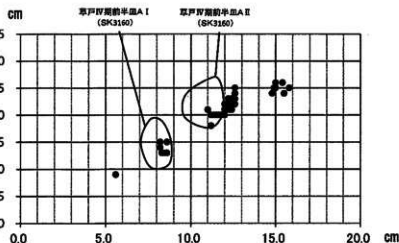
ア A類について

A類の皿については、草戸千軒町遺跡の土器編年⁽¹⁴⁾(以下、「草戸編年」と略す。)を参考に時期を考えてみたい。このタイプの皿は草戸編年ではIV期にみられる「皿A」にあたり、草戸編年の皿AⅠ・AⅡ・AⅢは、本城跡のAⅠ・AⅡ・AⅢに該当する。ちなみに、草戸編年のIV期前半からみられる大型の皿AⅣはSX1ではみられないが、SX2でこれに該当するとみられる小片(第18図117)が出土している。

SX1のA類は法量や調整、胎土などをみると、草戸千軒町遺跡出土の皿Aとよく似た様相ではあるが、しかし、詳細にみれば草戸編年のIV期前半の皿Aの範疇からははずれる部分が見られる。第22図はSX1出土のA類と草戸千軒町遺跡でIV期前半の遺構であるSK3160⁽¹⁵⁾出土皿Aの口径と器高を比較したものである。AⅡを比べると、SK3160は口径9.5~12.0cm、器高1.7~2.7cmと広範に分布しているが、中でも特に口径10.5~11.5cm、器高2.0cmに集中している。一方、SX1は口径11~13cm、器高2.0~2.5cmに集中しており、SX1の方が一回り大きく深い器形となっている。また、AⅠでも分布範囲が重なってはいるが、SK3160の分布の中心は7.5~8.5cmであり、SX1出土の皿Aは口径が大きな方に分布が集中しており、むしろこれらの法量分布、特に皿AⅡについては、草戸編年Ⅲ期に位置づけられているSG2550⁽¹⁶⁾やSK4473⁽¹⁷⁾のものと分布が重なる。

これらの遺物群を草戸編年のⅢ期とするかIV期とするかを判断するためには、遺物組成を詳細にみる必要がある。ここでその検討は困難だが、葛城跡では4種類の法量がみられることからIV期の範囲内と考え、草戸編年のIV期前半を新古に分け、これまでのIV期前半の資料を新段階、本城跡のA類を古段階とすることが適当と考えられる⁽¹⁸⁾。

なお、暦年代については、草戸編年ではこれまでIV期前半は15世後半、IV期後半は15世紀末~16世紀初頭とされていた。これを子細にみれば、Ⅲ期とIV期前・後半の遺構出土の京都系土師器と瀬戸美濃焼とともに、IV期後半新段階の遺構から出土した墨書木簡に記載されている年代からおおよその年代観が導き出されている。このうちIV期後半新段階は、墨書木簡から16世紀初頭に位置づけられる点は動かさない



第22図 SX1出土土師質土器A類法量分布図

思われるが、その前段階のⅣ期前半古段階・同新段階・Ⅳ期後半古段階の3小期を15世紀後半に押し込めるのはやや無理があるように思われる。現時点では草戸編年Ⅳ期の幅を広げ、Ⅳ期前半古段階を15世紀半ば頃としておきたい。

イ BⅡ類について

BⅡ類の皿については、県内ではまとまった資料はないが、管見の限りでは福山市の城山A遺跡調査区内¹⁰⁴、尾道市の牛の皮城跡北郭群5郭¹⁰⁵での出土が確認できる。牛の皮城跡出土の資料は口径13.0cm、器高2.2cmでS X 1出土のものに比べると浅くなっており、また草戸編年Ⅳ期後半の皿AⅢが出土していることから、BⅡ類は年代が下るに従い、口径・器高が縮小する傾向がうかがえる。もしそうであるならば、城山A遺跡出土のものは口径9.8cm、器高2.65cmと一段と口径が小型化（器高は5mmほど大型化しているが）しており、さらに年代が下る可能性がある。

一方、葛城跡をさかのぼる資料は不明だが、体部外面にナデによる幅広の凹凸がみられる事例としては、広島市の恵下城跡¹⁰⁶、神石高原町の帝釈観音堂洞窟遺跡¹⁰⁷がある。ただ、これらはいずれも器高が高く、杯に分類されるもので、本城跡のBⅡ類と関連付けられるかどうか不明である。

県外では、山口県山口市の大内氏館跡第11次調査溝1出土遺物¹⁰⁸に類似の資料をみることができる。このうち、口径15.2~12.2cm、器高2.8~3.3cmの一群を詳細にみると、底部が6cm程度のものと4~5cm程度のものに分類が可能であり¹⁰⁹、前者は本城跡BⅡ類と形態的な特徴がよく似ている。（ちなみに後者はDⅡ類に類似する。）これらは、胎土・色調・厚さは葛城跡出土資料とは大きく異なり、直接的な関連性は認められないが、何らかの影響を考えることも可能であり、今後の検討課題としておきたい。

ウ CⅡ類について

C類の皿については、管見の限り、県内では類例はない。CⅡ類について、口径・底径・器高、調整及び胎土で類似するのは、岡山県岡山市の宮南遺跡土壇11出土資料¹¹⁰である（ただし、底部切り離し技法はB類のような回転系切りで、また体部から口縁部にかけてはやや厚く、まったく同一式かどうかは検討を有する）。この土壇11出土遺物の時期は、共存する碗A（底部丸底の碗）の口径が8.8~9.5cmで、特に9.0cm前後にまとまっており¹¹¹、草戸編年でいえばⅡ期後半最新段階（9.25~9.65cm¹¹²）よりさらに小型化していることから、Ⅱ期後半最新段階よりも下る年代をあてることができよう。碗Aは草戸千軒町遺跡ではⅢ期以降は出土しないが、他地域では出土がみられることが指摘されており¹¹³、宮南遺跡もその一つといえる。土壇11の時期について報告書では、関連する遺構から出土した永楽通宝（1408年初鑄）や、同じく関連する遺構の放射性炭素年代がAD1323~1415であることから、「14世紀後半から15世紀初頭の間にある」と推定されている。

エ DⅠ類について

D類は底部が小さな一群で、底部切り離し技法でDⅠ類とDⅡ類に分類した。

DⅠ類は、口径・器高・底径が次で述べるDⅡ類と似ているが、すべて静止系切りである点は

特徴的である。回転糸切りが多数である遺物群の中で数点静止糸切りが混じることはあるが、このような静止糸切りが主体をなす事例は県内ではあまりみられない。その中で、府中市の備後国府跡910a TのP 2からは土師質土器小皿16点、古銭5点、鉄鏝1点が出土しており、そのうち小皿は15点が静止糸切りという特異な例である²⁰⁰。古銭は最新のものが永楽通宝であることから、これらの遺物は15世紀以降のものと考えられているが、口径5～9cmの小皿のみで、DⅠ類とは比較ができない。府中市周辺に静止糸切りが多いという傾向も特に見られないことから、DⅠ類について詳細は不明である。今後の関連資料の出土を待ちたい。

オ DⅡ類について

DⅡ類は、県内では東広島市・広島市・廿日市市など安芸南部を中心とした地域でみられ、中でも東広島市域で多く出土するタイプで、山口県山口市の大内氏館跡出土の在地系土師器皿（いわゆるA式土師器皿。以下「大内式土師器」²⁰¹と省略する。）に強い影響を受けている一群である。ここでは、広島県内で出土している大内氏の文化の影響を受けた一群を「大内系土師質土器」と仮称しておく。これは周防国の守護大名大内氏が安芸国支配のため現在の東広島市に拠点を置いていたことに関連すると思われる。

葛城跡出土のDⅡ類に類似する資料は、東広島市の城仏土居屋敷跡下層²⁰²と、東広島市の山崎1号遺跡SK 2²⁰³から出土している。

城仏土居屋敷跡下層からは土師質土器皿・鍋のほか備前焼などの国産陶器や、白磁稜花皿や雷文帯・蓮弁をもつ青磁碗等が出土している。土師質土器は小皿のほか、口径12.6～15.1cm、器高2.6～3.7cmの皿が出土している。一方、上層の皿は口径が11.8～14.0cmと比較的小さくなるが、器高は2.8～4.3cmと下層とそれほど変わらない。

山崎1号遺跡SK 2からは器表面に幅1cm以下の細かな凹凸が残るものが多くみられ、それらは小型品を除くと口径12.8～13.4cm、器高2.6～3.4cmであり、その中の墨書が施されている1点がDⅡ類に酷似する²⁰⁴。

これらの資料から、DⅡ類の年代について考えてみたい。広島県内の大内系土師質土器について概観すると、大きくは次の3つに分類できる。

I類 整形段階でついた幅1cm以下の細かな凹凸、いわゆるロクロ目の上をさらにナデで、凹凸をなくすように調整したもの。完全にロクロ目が消し切れていない部分もある。胎土は比較的精良で、体部から口縁部にかけては1～2mmと薄い。

II類 仕上げのナデを省略し、ロクロ目を残したままのもの。胎土はやや粗くなる。体部から口縁部にかけては2～3mmとやや厚くなる。色調は白い

III類 整形段階でロクロ目が生じないもので、全体的には横ナデが施されているが、凹凸はほとんどみられない。胎土は粗く、体部から口縁部にかけては2～4mmと厚くなる。

I類は葛城跡DⅡ類や城仏土居屋敷跡下層、II類は山崎1号遺跡SK 2、III類は城仏土居屋敷跡上層や山崎1号遺跡SK 1などでみられる。

これらI～III類は、I→II→IIIの順で、整形・調整方法が次第に粗雑化に向かう並びとなって

おり、このような調整方法の変遷は、大内氏館跡でも確認されている。そして、ここでいうⅠ類が大内Ⅱ期、Ⅱ類が大内Ⅲ期、Ⅲ類が大内Ⅳ期に該当しており、大内系土師質土器は大内式土師器と密接な関連を有すると考えられる。ただ、異なっている点も多い。例えば、大内Ⅱ期でいえば、大内式土師器の口縁部は内湾気味であるのに対し、大内系土師質土器は直線的であるし、大内Ⅲ期でいえば大内系土師質土器は歪みが大きく内底面の調整も粗い。しかし、両地域の土器の形が微妙に異なっている中で整形・調整・器形の特徴が部分的に共通している状況は、大内系土師質土器が大内式土師器を手本にしながら在地である程度アレンジし、あるいは似せる努力をしながら十分に似せきれなかった状況を反映しているように思われ、大内式土師器を参考に暦年代を推定することは可能と考えられる。ただ、時期がずれて伝播する可能性も残っており、完全な併行関係にあるかどうかは広島県内の資料の蓄積を待った方がいいように思われる。当面は、大内系土師質土器は、大内式土師器の時期と同時期もしくは若干後出する可能性を考えながら、時期を推定していきたい。

葛城跡DⅡ類は大内Ⅱ期(Ⅱ式)に併行すると考えられるが、大内式土師器ではこの時期をいつ頃としているのであろうか。古賀信幸氏が平成3(1991)年に示した編年案³³⁾では、大内Ⅱ期は15世紀後半とされていた。これは共伴する京都系土師器や輸入陶磁器から大内Ⅲ・Ⅳ期の時期の位置づけがなされ、それに先行する時期としてⅡ期の年代が決められたものと思われ、古賀氏も大内Ⅰ・Ⅱ期については年代修正への含みを残した形となっている。その後平成12(2010)年、北島大輔氏は古賀氏の編年を細分し、さらに一部年代の変更も行っている³⁴⁾。暦年代の検討については、周防国分寺S B350出土の資料の分析では、「大内Ⅱ式の少なくとも一時期は15世紀初頭～前半と接点をもつと」している。また、これに続く大内Ⅲ式の暦年代は、共伴する備前焼から大内ⅢA2式(大内Ⅲ期を4期に細分したうちの2番目の時期)を15世紀後半頃としており、これにより大内Ⅲ式の始まりは15世紀後半を一小期さかのぼる時期、すなわち15世紀半ばと推定しており、これをさかのぼるⅡ期は14世紀末～15世紀前半とされている。

カ E類について

E類は底部からハの字状に開くEⅠ類と、やや内湾気味に立ち上がるEⅡ類という、形の違うものを一つの類にまとめた。胎土が非常に特徴的であるが、管見の限りでは、県内では類例は確認できない。EⅡ類の器形については、県内というよりはむしろ愛媛県の島嶼部である今治市の能島城跡出土の皿B類³⁵⁾や見近島城跡出土の皿³⁶⁾に近い。ただ、実際に比べてみると同一のものは見当たらず、現時点では分布範囲は不明としておきたい。

(3) SX2出土の土師質土器の位置づけ

SX2からは少量の土器が出土している。完形のものではなく、図化できたのは8点のみである。このうち、第18図117は、先述のSX1出土土器A類で、口径は不明ながらも器高からAⅢよりも大きな一群、すなわちAⅣ類に分類できる。今回の調査ではAⅣ類はこの1点のみである。

それ以外の資料については、SX1から出土した資料のどの分類にも属さないし、これまで多くを参考にしていた草戸千軒町遺跡からもこの形態の皿は出土していない。そこで、SX2出土

土器の位置づけを行うに当たり、三原市小童遺跡1号積石⁹⁷⁾と三原市福礼中世墓N-1土坑⁹⁸⁾から出土した皿を比較検討してみたい。(第23図)

小童遺跡1号積石は、積石の下にある径約3.7×3.1m、深さ約0.5mの土坑からは多量の礫とともに多量の土師質土器皿が出土しており、土坑内部からは北宋銭とともに永楽通宝(1408年初鑄)が1点出土している。第23図4は、小型の皿で器高がやや高く、杯に近い器形のものでSX2出土物のうちの第23図1・2(第18図114・115と同じ)に似る。

また、福礼中世墓N-1土坑からは、草戸編年では15世紀後半のIV期前半(本報告で新段階とした時期)の皿Aとともに、口径が異なる2種類の皿が6点出土している。このうち口径の大きな5点(うち1枚を第23図6として掲載)については、第23図3(第18図118と同じ)と、口縁端部に違いはあるものの、口径・器高・底径が類似しており、同時期の可能性があると思われる。一方、口径・器高の小さな1点(第23図5)は、口径の大きな一群と寸法規格が異なるだけで同時期である可能性もあるが、時期が下るにしたがって小型化する傾向から考えて、口径の大きな一群よりも新しい時期である可能性も考えられる。

以上のように、SX2出土土器は三原市域で出土する土器と同じ系統の土器であると考えられる。このような形態の皿は、東に隣接する尾道市域ではみられず、また北西に隣接する東広島市域ではわずかに認められる⁹⁹⁾ものの主体をなすものではなく、比較的狭い地域(例えば郡単位)での流通が考えられる。

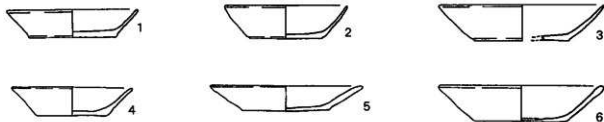
3 葛城跡の歴史的位置づけ

(1) 葛城跡の年代

葛城跡が築城され存続した年代については、これまでに随所でふれてきたが、ここでまとめておきたい。判断材料として最も重視するのは、多量に出土した土師質土器である。

SX1出土のA類は、草戸編年との比較により、従来草戸編年で15世紀後半とされていたIV期前半からさらにさかのぼることから、15世紀半ばを想定した。

B類については、B I類は不明としたが、B II類については尾道市の牛の皮城跡の資料との比



第23図 SX2出土土師質土器と他遺跡との比較(1:3)

(1~3:葛城跡SX2, 4:小童遺跡, 5・6:福礼中世墓)

較から、草戸編年Ⅳ期後半（16世紀初頭）よりもさかのぼることが想定されるが、上限については不明であるとした。ただ、山口県山口市の大内氏館跡出土資料のうち、大内Ⅱ式Aとされる資料中に類似するものがあり、大内Ⅱ式（14世紀末から15世紀前半）と同時期かそれ以降であると考えた。

C類については、県内では類例がなく、岡山県岡山市の宮南遺跡出土資料と比較した。宮南遺跡では、永楽通宝や関連する遺構の放射性炭素年代から、時期を14世紀後半から15世紀初頭の間とされている。

DⅠ類は比較資料はないが、DⅡ類は東広島市の資料とともに、調整等の共通性から、前述の大内氏館跡出土資料のうち大内Ⅱ式と関連する可能性が高いと考えた。

E類については、愛媛県の島嶼部との関係を考えてが、現時点では他遺跡との比較は困難であり、時期は不明とせざるを得ない。

SX2出土遺物は、三原市小童遺跡及び福礼中世墓出土資料、東広島市薬師城跡と関連付け、概ね15世紀代と考えたが、SX2からはSX1からも出土している青磁や亀山焼の小片が出土しており、その他の土器や焼けた壁土等の出土状況から考えて、SX1とSX2はほぼ同時期の遺構と考えられる。

このように、本城跡出土の資料はいずれも15世紀代を示しており幾分幅があるが、ここではやはり出土点数が多く、より細かな型式分類・年代比定が行われている草戸編年ⅢAを基にして考察した葛城跡A類を根拠に、15世紀半ば頃の年代を考えておきたい。これは、遺跡内から出土した青磁や備前焼等の遺物の年代とも矛盾しない。

なお、出土遺物全体をみると、他の時期の遺物はほとんど出土していない。郭全体を調査したわけではないので断定は危険だが、築城後は短期間しか使用されなかったものと思われる。

（2）遺構と遺物の検討からみた葛城跡

前項までで検討したことをふまえ、再度考古学的にみた葛城跡の特徴と課題についてまとめてみたい。

まず、遺物からみると、すでにみたように、SX1とSX2から出土した土師質土器皿の内容が大きく違う点があげられる。SX1から出土した土師質土器のうち、A類は備後南部から伊予島嶼部に広く分布している⁽⁴⁰⁾ことから、葛城跡で出土することは首肯できる。それ以外の器種については、分布が不明なものが多いが、儀礼に伴い一括投棄された皿の中に、SX2出土土師質土器皿のような比較的狭い範囲で流通する地元の皿が含まれておらず、なぜこのような出土状況となったのかは今後の検討課題とした。

遺物に関連して、もう一つ特徴としてあげておきたいのは、今回調査した中では、武器が出土していないという点である。刀子の一部とみられる鉄器は出土しているが、武器というよりはむしろ工具であろう。広島県内の城館遺跡の集成を行った小都隆氏によれば、武器が出土している城館跡は、全体のおよそ24%ということであり⁽⁴¹⁾、本城跡についても武器が出土しない多数の城跡の一つといえる。

城跡のつくりとしては、東南隅を矩形とし、そこに北東下から上る登城路を取り付け、さらに東面に石垣を用いていた可能性があることから、東側を強く意識したつくりであるといえる。現在、葛城跡の東と西に隣接する位置には港がつくられている。西の港は近年つくられたものであり、東の港の方が古いと考えられるが、この港がいつ頃までさかのぼるのかは不明である。ただ、当地域は西からの風が強く、城の東側が風を避ける場であったとみられ、古来より港として利用されていた可能性は高いと思われ、城跡はこの港と密接な関連を有する可能性がある。

しかし一方で、遺物からは本城跡の存続期間は短期間であったことが明らかになっており、これからすれば、例えば、港の管理施設や海域の船舶の警固のための見張り所、あるいは海賊行為の拠点等のようにある程度継続して利用したであろう施設を考えるのは難しく、短期的で突発的な事象、あるいは一時的な緊張状態に対応してつくられたことを想定しなければならないのではないと思われる。例えば、何らかの緊急時に備えた見張り・防御・(港からの)避難のため施設が考えられよう。

このうち防御に関しては、武器は出土していないことから、軍事的な側面はいささか弱いようにも思われ、見張りや有事の際に逃げ込む避難の意味合いの方が強いように思われる。城跡が港のある東側を意識してつくられているのも、城から港を管理(城→港)するのではなく、港から城へ入る(港→城)ことを意識した結果ではないだろうか。

(3) 文献資料からみた葛城跡

上述のように、葛城跡築城の経緯については、考古学的な検討の結果では今ひとつ不明な部分があるが、次に中世史料から考えられる築城の経緯についてみてみたい。

第Ⅱ章で既述したとおり、15世紀の大崎上島は、大崎中荘と大崎東荘は沼田小早川氏の惣領家、本城跡がある大崎西荘については、竹原小早川氏から所領を譲られた土倉氏の庶家として位置づけられる小早川徳平の領有が確認できる。

小早川徳平の子と考えられる小早川円春が1446(文安3)年に書いた置文写によれば、「下島」の領有をめぐるその20余年前に「三島」と合戦になったとき、土倉氏らの協力を得た旨の記述がある。「三島」は、現在の愛媛県今治市の大三島を本拠とする善氏と考えられ⁽⁴⁰⁾、三島七島の一つである「下島」(現在の大崎下島)をめぐる争いがあったことがわかる。葛城跡は大三島と大崎下島の中間にあり、1420年代に当地域で合戦があったとすれば、何らかの対応に迫られたであろう。

次に、沼田小早川氏の惣領家内における相続争いに伴う動乱があげられる。1414(応永21)年、沼田小早川氏の惣領則平が嫡子持平に譲与した所領の中の一つに「大崎嶋中東老岐」がみえる。これは大崎中荘、大崎東荘及び大崎上島に隣接する生野島を指していると考えられるが、これらはその後、1431(永享3)年に持平に不孝の儀があったとして悔い返されて持平の弟の照平に譲与され、その後持平と照平の相続争いに発展した。その際、1442(嘉吉2)年、持平への処分を不服とした親類・被官人が「本郷」の要害に立て籠もったのに対し、幕府は守護山名氏に命じて芸備両国の國人を動員し、これを制圧している⁽⁴¹⁾。「本郷」は現在の三原市本郷町と考えられ、大

崎上島で同様のことが起こった記録はないが、持平が領有していた大崎上島の「大崎東浦」でも、この時何らかの相続争いをめぐる緊張状態があり、大崎上島全域でこれに対処する動きがあった可能性もある。

1465（寛正6）年には、伊予の守護河野氏と細川氏の争いに伴い、幕府が大内教弘や小早川熙平に細川勝元への合力を命じている。しかし、大内氏は河野氏の側に寝返って反細川方としての動きをとり、大内・河野氏と細川方の小早川氏との間で何らかの緊張状態があった可能性がある。市川裕士氏は、当時河野氏の被官であった三島村上氏の勢力伸長の背景として、「小早川氏勢力の駆逐と芸予諸島域の反細川派勢力による掌握を図る大内・山名・河野氏の政治的意図」を想定している⁽⁴⁶⁾。三島村上氏による小早川氏勢力の駆逐についての具体的な動向は、文献資料では愛媛県の弓削島や尾道市因島でみることができる⁽⁴⁶⁾が、大崎上島にもこうした動きは伝わっていた可能性もある。

以上のように、15世紀を通じ、当地域にはさまざまな対立とそれに伴う緊張があったことがわかり、具体的な契機は不明ながら、当時の人々がこれらの緊張状態に対処する必要に迫られたことは想像できる。

（4）海城としての葛城跡の特徴

海を臨む城跡の中で、広島県内で発掘調査されたものに、竹原市の高崎城跡⁽⁴⁶⁾、尾道市向島の丸山城跡⁽⁴⁷⁾、尾道市瀬戸田町の俵崎城跡⁽⁴⁸⁾があげられる。このうち、高崎城跡と丸山城跡はいずれも遺物が少なく、高崎城跡は草戸編年Ⅳ期後半（15世紀末～16世紀初頭）、丸山城跡は草戸編年Ⅳ期前半（15世紀後半）と短期間の使用が考えられる。一方、俵崎城跡は、14世紀後半から16世紀まで概ね継続した使用が考えられ、海を臨む城跡の中には短期使用の城と長期使用の城があることがわかる。

長期使用の城については在地領主層の築城が考えられ、港の管理施設や船舶の警固のため基地、あるいは海賊行為の拠点のいずれか、あるいはそのすべての要素を兼ね備えた施設と考えられる。山内譲氏は俵崎城を「水軍活動の拠点」として位置づけ、瀬戸田の2つの港町に「商港」と「軍港」としての側面を見出している⁽⁴⁹⁾。このような城は、これまで「水軍城」⁽⁵⁰⁾や「海賊城」⁽⁵¹⁾という呼称でよばれ、現在では「海城」という名称がみられるようになった。「水軍城」は水軍の拠点、「海賊城」は海賊の拠点としての名称と思われるが、「海城」は軍事的な側面に「澳と港町の掌握」を加え、「港を長期間防衛するための軍事施設」という定義づけもみられる⁽⁵²⁾。

また、愛媛県教育委員会が行った海城の調査では、海城を「島あるいは岬・半島の一部など臨海部に立地し、海を縄張りに取り込む構造の城郭」と定義づけ、特に船の保留施設とされる岩礁ピットに着目した検討が行われ、岩礁ピットを有する海城の分布から沖乗り航路を推定している⁽⁵³⁾。しかしその前提は、海城には「中世の海賊衆」が常駐しており、「警固」活動をはじめ、「駄別銭」や「帆別料」など「海上通商税の徴取」のほか「海賊衆自らが日常的に行う海運や商業活動」の場としての機能を想定しており、葛城跡のような短期使用の城は想定されていない。

これまで、海に面する城跡は、海賊衆のさまざまな活動の拠点と解されてきたが、これまでの

検討で葛城跡はそれとはやや異なっており、小都隆氏の分類⁵⁰に従えば「砦」に近い。こうした城は、水軍がいたわけではないから「水軍城」とは呼べず、海賊がいたわけではないから「海賊城」とも呼べず、また先の「港を長期間防衛するための軍事施設」との定義に従えば「海城」の範疇からはずれてしまう（避難所も軍事施設と解するなら別であるが）。海に面する城を軍事面だけに着目するのではなく、今後、軍事的色彩が薄く短期間しか使用されなかった事例も含めた、新たな「海城」の定義づけとその実態についての研究を深化させていく必要があるのではないだろうか。

海に面する城跡は、内陸の城跡と同様に、さまざまな契機で造られており、海賊衆の活動だけでなく中世に生きる人々の多様な姿を読み取ることができる。今回の検討では、城跡全城を調査していない中でやや解釈が飛躍したきらいもあるが、さらなる類例の増加を待って、今後も検討を加えていく必要がある。本城跡の調査成果が、今後のさらなる地域史解明の一助となることを期待したい。

注

- (1) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『郡山城下町遺跡』平成5（1993）年
- (2) 大崎町『大崎町史』昭和56（1981）年
- (3) 注（2）文献と同じ
- (4) 広島県『広島県史 中世編』昭和59（1984）年
上記文献によれば、中世史料では、麻苧の栽培は大田荘（現在の世羅郡世羅町）、入江保（現在の安芸高田市）、都宇竹原荘（現在の竹原市）、小童保（現在の三次市甲奴町）で確認でき、近世初頭に木綿が普及するまで、広く栽培されていたと推定されている。
- (5) 鈴木康之「土師質土器の機能・用途」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告 V』広島県教育委員会 平成8（1996）年（後に、鈴木康之「中世集落における消費活動の研究」真陽社 平成18（2006）年に再録）
- (6) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『有井城跡発掘調査報告』平成5（1993）年
- (7) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『薬師城跡』平成8（1996）年
- (8) 竹原市教育委員会『高崎城跡発掘調査報告』昭和61（1986）年
- (9) 尾崎光伸「地表面観察による調査の成果」『広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第4集』広島県教育委員会 平成8（1996）年
- (10) 小都隆「中世城館跡の分類と編年 - 広島県を例として -」『中世城館跡の考古学的研究』漢水社 平成17（2005）年
- (11) 広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第3集』平成7（1995）年
- (12) 中井均「基調講演Ⅱ 戦国の山城を掘る - 発掘調査で明らかになった山城の実像 -」『平成25年度ひろしまの遺跡を語る 城館研究最前線 - 発掘城館から探る中世社会 - 記録集』平成27（2015）年
- (13) 広島県教育委員会『恵下城跡発掘調査概報』昭和53（1978）年
- (14) a 広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡発掘調査報告 I』平成5（1993）年

- b 広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』平成6(1994)年
- c 広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ』平成7(1995)年
- d 広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ』平成7(1995)年
- e 広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ』平成8(1996)年

(15) 註(14) bに同じ

なお、資料の実見・計測にあたっては、広島県立歴史博物館に便宜を図っていただいた。

(16) 註(14) bに同じ

(17) 註(14) dに同じ

S G2550出土の皿Aは、実見の結果、器高と胎土により3類に分類でき、その中で最も器高が低く胎土が精緻な一群が葛城跡A類と同様の法量分布をみせる。

また、草戸千軒町遺跡以外で葛城跡A類と同様の法量を示すものとしては、三原市本郷町の三太刀遺跡D区SK4があげられる。ここからは、葛城跡A類と同規模の、口径12.2cm、器高2.6cmのAⅡ類と、口径15.1cm、器高2.55cmのAⅢ類が各1点ずつ出土している。ただ、共伴する杯A(口径11.8cm、器高3.9cm)は口径から概ね草戸千軒町Ⅱ期後半の範疇で捉えられる資料である。A類をそこまで遡らせることができるか、もう少し資料の増加を待ちたい。

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『三太刀遺跡(Ⅰ)』平成15(2003)年

(18) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『城山』平成8(1996)年

(19) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4)』平成20(2008)年

(20) 註(13)に同じ

(21) 谷岡能史・下元優・前田剛伸「帝釈観音堂洞窟遺跡・帝釈大風呂洞窟遺跡出土の土師質土器からみた両遺跡の利用形態と関連性」『帝釈峽遺跡群発掘調査室年報XXI』広島大学大学院文学研究科帝釈峽遺跡群発掘調査室 平成19(2007)年

(22) a 古賀信幸「大内氏遺跡出土土師器編年」『大内氏館跡Ⅳ 大内氏関連町並遺跡Ⅰ』平成3(1991)年

b 北島大輔「大内式の設定」『大内氏館跡Ⅱ』山口市教育委員会 平成22(2010)年

(23) 底部の大きさによる細分の可能性についてはすでに註(22) a 文献でふれられている。

なお、資料の実見にあたっては、山口市教育委員会に便宜を図っていただいた。

(24) 岡山県教育委員会『中島遺跡 宮南遺跡 国長遺跡 天神河原遺跡』平成21(2009)年

(25) これらの遺物は歪みがあることから、報告書に掲載されている24点中、長径と短径を計測できる14点を対象とし、長径と短径の平均をもって口径とした。

なお、資料の実見・計測にあたっては、岡山県古代吉備文化財センターに便宜を図っていただいた。

(26) 註(14) eに同じ

(27) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『尾道中世遺跡発掘調査報告書 一尾道市土堂二丁目所在一』昭和55(1980)年

尾道市教育委員会『尾道遺跡 一市街地遺跡発掘調査概要 1985-』昭和62(1987)年

- 鈴木康之「南北朝期の「草戸千軒」」『考古論集 -河瀬正利先生追悼記念論文集-』平成16(2004)年
 なお、資料の実見にあたっては、尾道市教育委員会に便宜を図っていただいた。
- (28) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『備後国府跡 -推定地にかかる第9次調査概報-』平成3(1991)年
- (29) 註(22) bに同じ
 「大内式土師器」は在来系土師器皿(A式土師器皿)だけでなく、京都系土師器皿(B式土師器皿)を含んだ呼称であるが、本城跡からは京都系の土師質土器は出土していないため、ここではA式土師器皿のみをさす用語として「大内式土師器」としておきたい。
- (30) 財団法人東広島市教育文化振興事業団『城仏土居屋敷跡発掘調査報告書』平成17(2005)年
- (31) 財団法人東広島市教育文化振興事業団『山崎1号遺跡発掘調査報告書』平成7(1995)年
- (32) 山崎1号遺跡SK2から1点出土しているI類は、主体をなすII類の中に古式のものが残存していたのであろう。なお、資料の実見・計測にあたっては、東広島市出土文化財管理センターに便宜を図っていただいた。
- (33) 註(22) aに同じ
- (34) 註(22) bに同じ
- (35) 田中謙「能島城跡出土遺物の様相 -芸予諸島をめぐる南北流通に関する予察-」『考古学と室町・戦国期の流通』日本中世土器研究会 平成23(2011)年
- (36) 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター『瀬戸内海大橋関連遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅲ (見近島城跡)』昭和58(1983)年
 なお、能島城跡、見近島城跡出土資料の実見・計測にあたっては、村上水軍博物館に便宜を図っていただいた。
- (37) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 XI』平成6(1994)年
 小童遺跡1号積石は、草戸編年I期の杯・椀や瓦器椀、あるいは近世の土師質土器や寛永通宝が出土しており、どこまで一括遺物として捉えられるか詳細な検討が必要ではあるが、土師質土器皿の多くは永楽通宝が示す15世紀初頭以降、概ね15世紀代のものと考えられる。
- (38) a 広島県教育委員会『福礼古墳発掘調査報告』昭和48(1973)年
 b 藤原芳秀「福礼中世墓出土土器について」『研究輯録 IV』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 平成6(1994)年
- (39) 註(7)に同じ
 SB1出土遺物中にみられる(例えば、註(7)文献第34図13・14)。薬師城跡はI期とII期に分けられ、I期は15世紀後半から16世紀中葉、II期はそれ以降16世紀末までと推定され、SB1はII期の遺構とされている。ただ、今回指摘した資料は、薬師城跡全体の出土遺物を見る限りI期のものと考えられ、混入したものと思われる。
 なお、薬師城跡出土遺物の暦年代は、I期は大内II～III期との併行関係から、II期はSB1出土の白磁杯

や他遺構出土の青花碗等から推定されている。先述のとおり、大内式土師器は暦年代の見直しが行われており、輸入陶磁器や他地域の土器の年代観に依拠しない在土器を用いた年代の検討が必要である。

(40) 鈴木康之氏よりご教示いただいた。

(41) 註(10)と同じ

(42) 豊町教育委員会『豊町史 本文編』平成12(2000)年

(43) 岸田裕之「大崎上島と小早川氏一族」『内海文化研究紀要』第9号 広島大学文学部内海文化研究室 昭和56(1981)年

(44) 市川裕士「南北朝・室町期における芸予の政治動向と沼田小早川氏の海上進出」『芸備地方史研究 235・236』芸備地方史研究会 平成15(2003)年

(45) 註(4)と同じ

(46) 註(8)と同じ

(47) 丸山城跡発掘調査団『丸山城跡発掘調査報告』平成12(2000)年

(48) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『狭崎城跡』平成10(1998)年

(49) 山内譲「港から港町へ 一安芸国瀬戸田と生口氏」『中世の港と海賊』法政大学出版局 平成23(2011)年

(50) 一例として、次の文献がある。

広島県教育委員会『瀬戸内水軍』昭和51(1976)年

(51) 一例として、次の文献がある。

新人物往来社『日本城郭体系 第13巻 広島・岡山』昭和55(1978)年

(52) 柴田龍司「海城の様相と変遷」『中世城郭研究 第22号』中世城郭研究会 平成20(2002)

(53) 谷若倫郎「いわゆる「岩礁ビット」を伴う海城と瀬戸内海航路」『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書 一埋蔵文化財編一』愛媛県教育委員会 平成14(2002)年

(54) 註(10)と同じ

小都氏は「砦」を「小規模・単郭で防御機能は弱く、生活感のない臨時施設」で「堀切や橋の他には防御施設はなく、施設はあっても小掘立柱建物が1棟だけの場合が多い。出土遺物はほとんど見られず、生活感がない点で小規模域とは基本的に性格が異なるが、反面、その立地から集落との関係が深い施設」としている。葛城跡の場合、小掘立柱建物(SX2)ではあるが、喫茶・遊戯・生産に係る遺物が出土しており若干の生活感がある点異なるが、それ以外では小都氏の定義に概ね合致すると考えられる。

a 葛城跡遠景
東から



b 東側石垣南端部1
東から



c 東側石垣南端部2
東から





a 東側石垣南端部
土層断面 南東から



b 東側石垣中央部 1
北東から



c 東側石垣中央部 2
南東から

a 東側石垣中央部
土層断面 北から



b 東側石垣南端部
スロープ状平坦面
北東から



c 東側石垣南端部
土層断面 南から





a 南側石垣東半部
南西から



b 南側石垣東半部
土層断面 東から



c 南側石垣西半部
南西から

a 南側石垣西半部
土層断面 西から



b 頂部平坦面
南西下トレンチ
土層断面 北から



c 西側石垣
南から

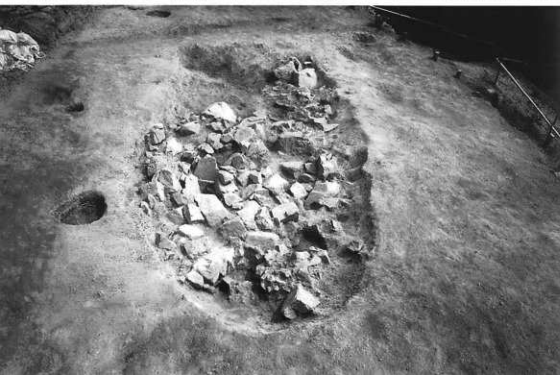




a 西側石垣
土層断面 南から



b SX 1 土層断面
南から



c SX 1
遺物出土状況
南から

a SX1 完掘
南から

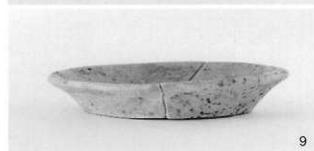
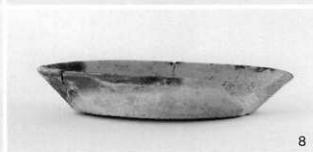
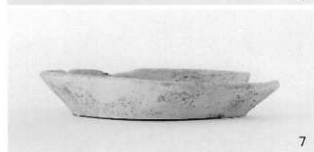
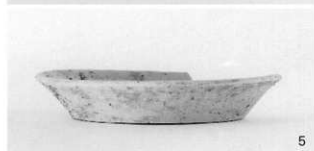
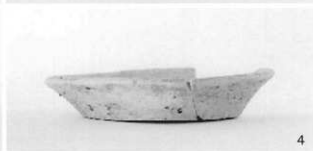


b SX2 完掘
西から

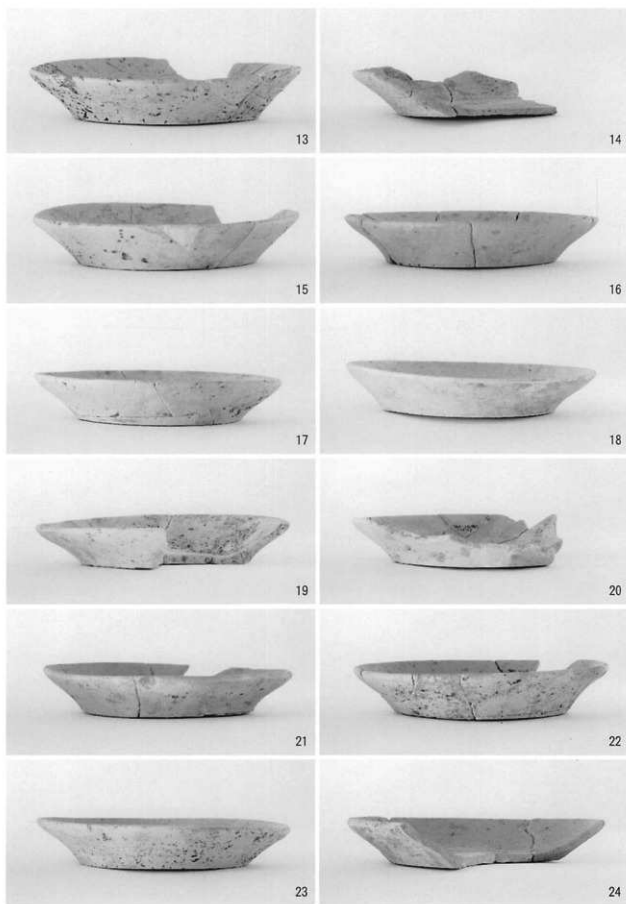


c SX3 完掘
南から

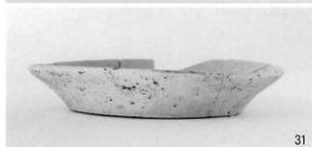
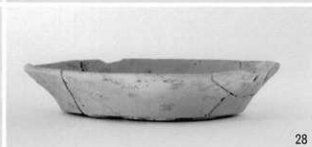
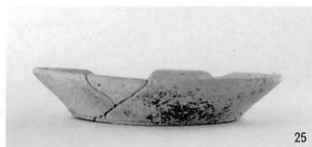




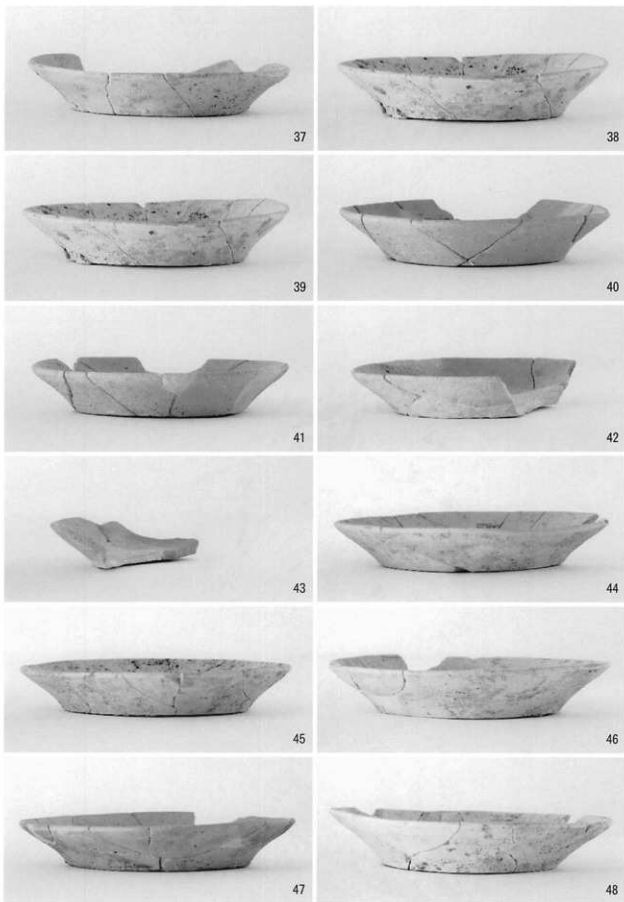
出土遺物 1



出土遺物 2



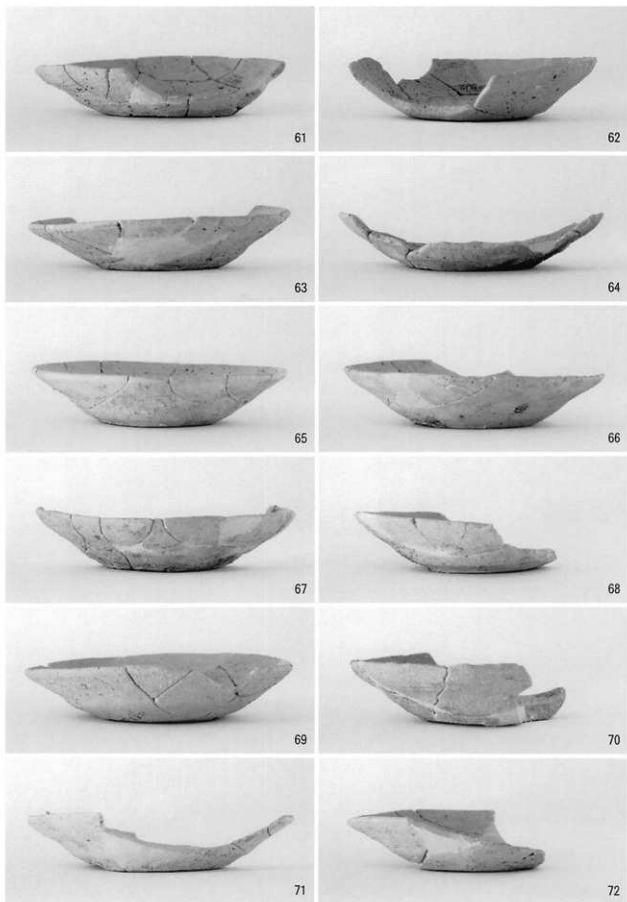
出土遺物 3



出土遺物 4



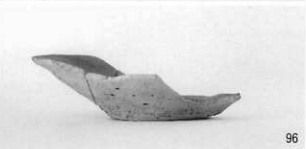
出土遺物 5



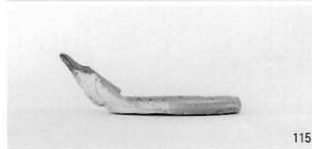
出土遺物 6



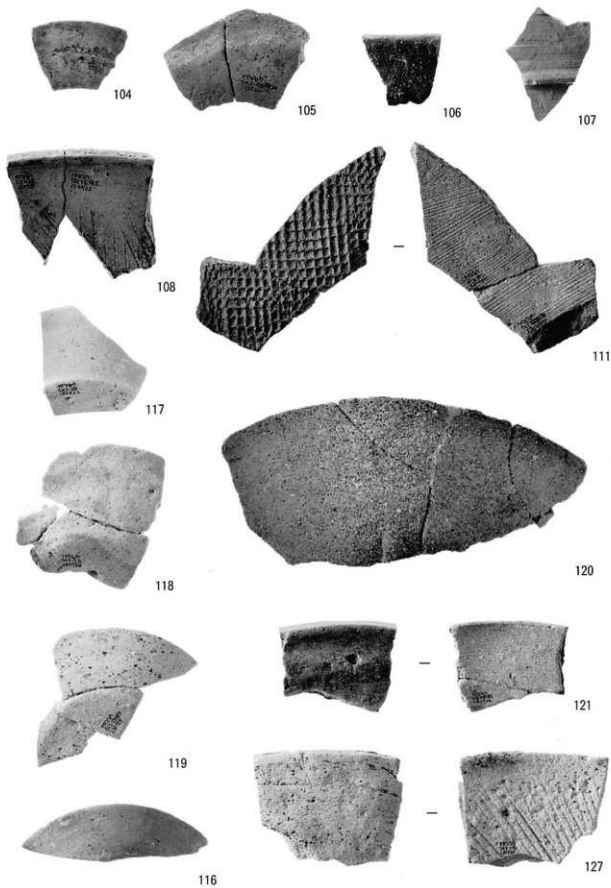
出土遺物 7



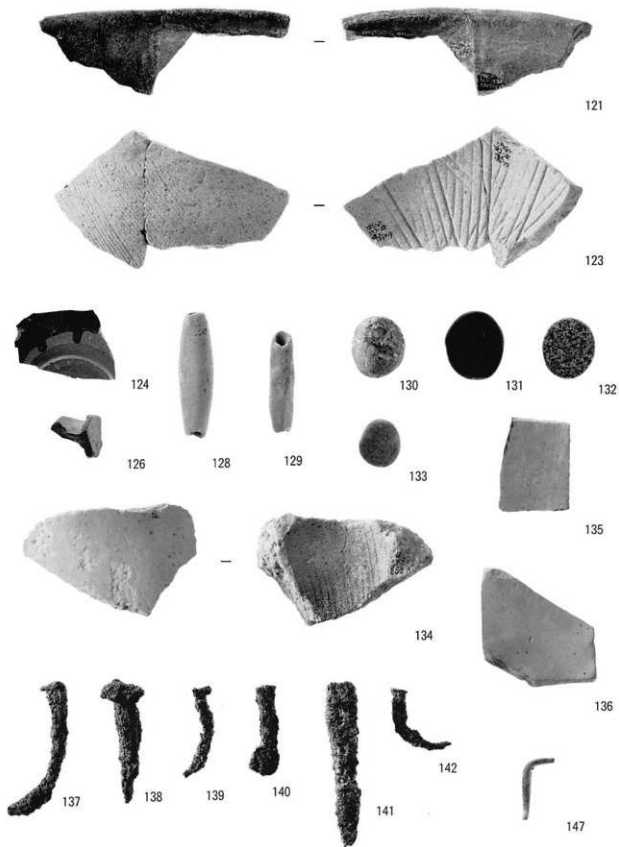
出土遺物 8



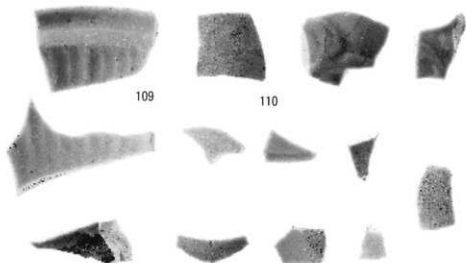
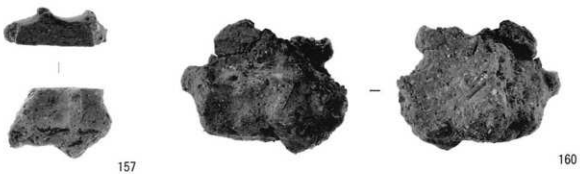
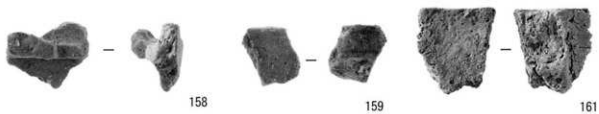
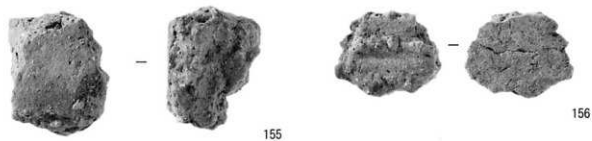
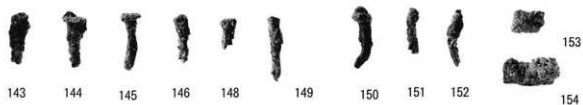
出土遺物 9



出土遺物10



出土遺物11



出土遺物12

報 告 書 抄 録

ふりがな	くずじょうあと
書 名	葛城跡
副 書 名	主要地方道大崎上島循環線道路改良工事に係る発掘調査報告書
シリーズ名	広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第74集
編 著 者 名	尾崎光伸
編 集 機 関	公益財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所 在 地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL.082-295-5751
発行年月日	西暦2015年3月6日

ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北 緯	東 経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号					
くずじょうあと 葛城跡	ひろしまけんよとたけん 広島県豊田郡 おほさきかみこまじょうまきうら 大崎上島町沖浦	34431	34429-2	34° 12′ 45″	132° 53′ 49″	20130624 ～ 20130731	1,830	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特記事項
葛城跡	城跡	中世	郭・石垣・段状遺構・ 土坑・井戸	土師質土器、瓦質土器、陶器（備前焼・亀山焼・天目碗）、磁器（青磁・白磁）、瓦、土製品（土埴・土玉）、石製品（基石・砥石）、金属製品（釘・刀子?）、壘土・鉄滓・巻貝・魚骨等	

要 約	葛城跡は、海に突き出るようにのびる丘陵先端に位置する単郭の城跡である。調査の結果、検出した石垣は一部が中世のもの可能性がある。郭からは井戸1基、性格不明土坑1基、段状遺構1基を確認し、段状遺構からは掘立柱建物跡1棟が検出された。土坑から約100枚の土師質土器皿が出土しており、何らかの儀礼に伴う一括投棄と考えられる。土師質土器の分析から、葛城跡は15世紀中ごろの城跡と考えられる。
-----	--

公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第74集

葛 城 跡

主要地方道大崎上島循環線沖浦工区
道路改良工事に係る発掘調査報告書

発 行 日 平成27 (2015) 年 3 月 6 日
編 集 公益財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
〒733-0036 広島県広島市西区観音新町 4 丁目 8 番49号
TEL (082) 295-5751 FAX (082) 291-3951
発 行 公益財団法人 広島県教育事業団
印 刷 所 鯉城印刷株式会社